

(資料)

中国語音読教材としての漢詩（2021）

（ピンイン、訓読、日本語訳つき）*

宮 下 尚 子

目録

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 蒹葭（詩經） | 28 絶句（盛唐 杜甫） |
| 2 易水歌（戦国時代末 荆軻） | 29 山行（晚唐 杜牧） |
| 3 垓下歌（秦末 項羽） | 30 江南春（晚唐 杜牧） |
| 4 虞美人歌（秦末 虞美人） | 31 楓橋夜泊（盛唐 張繼） |
| 5 傾城傾國（漢書） | 32 涼州詞（盛唐 王之渙） |
| 6 子夜四時歌（樂府詩集） | 33 登鶴雀樓（盛唐 王之渙） |
| 7 七步詩（魏 曹植） | 34 少年行（吳象之） |
| 8 詠鵝（初唐、駱賓王） | 35 乞巧（晚唐 林傑） |
| 9 登幽州台歌（初唐 陳子昂） | 36 山村（北宋 邵雍） |
| 10 涼州詞（盛唐 王翰） | 37 春夜（北宋 蘇軾） |
| 11 春曉（盛唐 孟浩然） | 38 水調歌頭（北宋 蘇軾） |
| 12 從軍行（盛唐 王昌齡） | 39 日本刀歌（北宋 歐陽脩） |
| 13 渭城曲（盛唐 王維） | 40 一剪梅（宋 李清照） |
| 14 鹿柴（盛唐 王維） | 41 春日（南宋 朱熹） |
| 15 相思（盛唐 王維） | 42 偶成（南宋 朱熹） |
| 16 黃鶴樓（崔顥） | 43 過零丁洋（南宋 文天祥） |
| 17 靜夜思（盛唐 李白） | 44 大德歌（春）（元 關漢卿） |
| 18 早發白帝城（盛唐 李白） | 45 大德歌（夏）（元 關漢卿） |
| 19 黃鶴樓送孟浩然之廣陵（李白） | 46 大德歌（秋）（元 關漢卿） |
| 20 秋浦歌（盛唐 李白） | 47 大德歌（冬）（元 關漢卿） |
| 21 子夜吳歌（盛唐 李白） | 48 常山有虎將（明 羅貫中） |
| 22 峨眉山月歌（盛唐 李白） | 49 憶昔常山趙子龍（明 羅貫中） |
| 23 春夜宴桃李園序（盛唐 李白） | 50 葬花吟（抄）（清 曹雪芹） |
| 24 江陵愁望寄子安（晚唐 魚玄機） | 51 蘭花草（胡適） |
| 25 春望（盛唐 杜甫） | 52 偶然（徐志摩） |
| 26 春夜喜雨（盛唐 杜甫） | 53 一代人（顧城） |
| 27 登岳陽樓（盛唐 杜甫） | |

*謝辞：本資料は、福岡大学研究推進部の研究経費によるものです。（中国言語文化研究 課題番号213001）

はじめに

この資料集は、授業の副教材として準備した教材プリントを加筆修正したものです。同様の趣旨で2017年にも一度副教材をまとめた資料を作成していただいておりますが、ピンインや漢字に誤りが多かったため、再度修正、加筆いたしました。ご了承ください。

授業では主教材として『漢語課本』（福岡大学中国語教科書研究チーム編著、金星堂出版）という教科書を使っていますが、そのほかに副教材として新聞記事、中国語の動画や歌謡曲、現代小説、高校までの古文の授業で親しんだことのある論語などの漢文や漢詩を紹介したり朗読したりしています。本資料では、そのうちの漢詩、詞、古文を集めました。

従来あまり訳されたり、教材として使われることは少なかったかもしれない序や賦、詞や元曲などの唐詩以外の文章や、現代詩もわずかですが収録しました。

また、できるだけ女性詩人の詩も取り入れるようにしました。漢詩は中国文学の世界においても、男性のものという暗黙の了解のようなものがあり、女性で漢詩を作るのは宮女のように身分が高く教育のある女性以外は、男性社会の中に身を置いて生きなければならない妓女ぐらいであったので、一般の女性が詩を作るのは恥ずべきことという意識があったようです。だからといって普通の女性が詩や文章から全く切り離されたところにいたわけではないことは、『紅樓夢』において、探春が仲間を集めて「海棠詩社」を立ち上げたことからわかります。

授業のために作ったプリント教材をもとにしているので、各資料はなるべくA4用紙1枚で収まるようにしています。フォントの大きさもまちまちです。長い詞や序などについては複数枚にわたってしまったものもあります。詩の訳文については、書き下し文のあとに、語句の注を入れ、文法的に注目すべき箇所があった場合には文法の注釈も入れるようにしましたが、注釈がないものもあります。現代語訳も、できるだけ入れるようにしましたが、書き下し文で十分意味が伝わるようなものについては現代語訳を入れていないものもあります。

詩の題や内容についても、注で補ったものもあれば、訳文の中にカッコで入れたり、語句の説明のところで補ったものもあります。要するに毎ページごとに形式が不揃いであり、必ずしも十全なものとはなっておりません。

ここに挙げた引用、表記や訳の誤り等はすべて宮下に責任があることを明記し、かつ今後のご指正をいただけますようお願い申し上げます。

詩文の引用、訳文の作成、作者略歴に際して、以下の文献等を参考にしました（発行年代順）。

- (1) 簡野道明 (1929) 『唐詩撰詳説』東京：明治書院。
- (2) 『全唐詩』 (1960) 北京：中華書局。
- (3) 田中克己訳 (1969) 『中国古典文学大系 第18巻 唐代詩集 下』東京：平凡社。
- (4) 前野直彬編 (1970) 『唐詩鑑賞辞典』東京：東京堂出版。
- (5) 前野直彬訳 (1970) 『中国古典文学大系 第18巻 唐代詩集 下』東京：平凡社。
- (6) 前野直彬編 (1972) 『宋詩鑑賞辞典』東京：東京堂出版。
- (7) 前野直彬訳 (1973) 『中国古典文学大系 第19巻 宋・元・明・清詩集』東京：平凡社。
- (8) 東洋学術研究所編 (1990) 『大漢和辞典 第14巻 語彙索引』東京：大修館書店。
- (9) 松浦友久、植木久行、宇野直人、松原朗著 (1999) 『漢詩の事典』東京：大修館書店。

- (10) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・幼兒篇』北京：北京大學出版社。
- (11) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・小學篇I』北京：北京大學出版社。
- (12) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・小學篇II』北京：北京大學出版社。
- (13) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・中學篇I』北京：北京大學出版社。
- (14) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・中學篇II』北京：北京大學出版社。
- (15) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・壯歲篇』北京：北京大學出版社。
- (16) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・大學篇』北京：北京大學出版社。
- (17) 國家語言文字工作委員會（2009）『中華經典詩文誦讀讀本・晚晴篇』北京：北京大學出版社。
- (18) 『デジタル大辞泉 逆引き検索対応』小学館（電子辞書版）。
- (19) 『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館（電子辞書版）。
- (20) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目電子辞書版』（2016）ブリタニカ・ジャパン株式会社。

1 蒹葭 (詩經)

蒹	葭								
jiān	jiā								
蒹	葭	蒼	蒼	白	露	爲	霜		
jiān	jiā	cāng	cāng	bái	lù	wéi	shuāng		
所	謂	伊	人	在	水	一	方		
suǒ	wèi	yī	rén	zài	shuǐ	yī	fāng		
溯	洄	從	之	道	阻	且	長		
sù	huí	cóng	zhī	dào	zǔ	qiě	zhǎng		
溯	遊	從	之	宛	在	水	中	央	
sù	yóu	cóng	zhī	wǎn	zài	shuǐ	zhōng	yāng	
蒹	葭	萋	萋	白	露	未	晞		
jiān	jiā	qī	qī	bái	lù	wèi	xī		
所	謂	伊	人	在	水	之	湄		
suǒ	wèi	yī	rén	zài	shuǐ	zhī	méi		
溯	洄	從	之	道	阻	且	躋		
sù	huí	cóng	zhī	dào	zǔ	qiě	jī		
溯	遊	從	之	宛	在	水	中	坻	
sù	yóu	cóng	zhī	wǎn	zài	shuǐ	zhōng	chí	
蒹	葭	采	采	白	露	未	已		
jiān	jiā	cǎi	cǎi	bái	lù	wèi	yǐ		
所	謂	伊	人	在	水	之	涘		
suǒ	wèi	yī	rén	zài	shuǐ	zhī	sì		
溯	洄	從	之	道	阻	且	右		
sù	huí	cóng	zhī	dào	zǔ	qiě	yòu		
溯	遊	從	之	宛	在	水	中	沚	
sù	huí	cóng	zhī	wǎn	zài	shuǐ	zhōng	zhǐ	

蒹葭

蒹葭蒼蒼たり、白露霜と爲る
 所謂伊の人、水の一方に在り
 溯洄し之に従へば、道阻にして且つ長し
 遡游し之に従へば、宛として水の中央に在り

蒹葭萋萋たり、白露未だ晞かず
 所謂伊の人、水の湄に在り
 溯洄し之に従へば道阻にして且つ躋る
 遡游し之に従へば、宛として水の中坻に在り

蒹葭蒼蒼たり、白露未だ已まず
 所謂伊の人、水の涘に在り
 溯洄し之に従へば道阻にして且つ右る
 遡游し之に従へば、宛として水の中沚に在り

語句

- 蒹葭 : 葦。蒹は長い穂のない葦、葭は生えたばかりの葦
 蒼蒼 : 繁ること
 白露 : 露の美称。白露。しらつゆ
 為 : 動詞。～になる。
 所謂 : いわゆる。ここでは、私が思うところの、という意味
 伊人 : かのひと。“伊”は指示代名詞
 溯 : 流れに逆らって上っていくこと
 洄 : まがりくねった水の流れ
 従 : おいかける、したがう
 阻 : けわしい、道がきびしい
 游 : まっすぐな水の流れ
 宛 : あたかも、まるで
 萋萋 : 生い茂る様子
 未 : まだ～していない。“已”（すでに）の否定で、「まだ～していない」
 「これまで～したことがない」という強い否定である
 晞 : 乾く
 湄 : 川岸、みぎわ
 躋 : 上る、あがる
 坻 : 河や湖の中の小島、中洲
 采采 : 盛んで多いさま
 已 : 止む、すでに
 涘 : 水辺、岸
 右 : まがっている、くねっていること
 沚 : 水辺の小さい洲、小島

文法 : 蒹葭萋萋、白露爲霜。

“爲（為、为）”は動詞。発音はwéi。“成为、变成”（～になる、かわる）という意味。

- (1) 我们要变沙漠为森林。
- (2) 東京为日本首都。

現代語訳:

水辺の葦は蒼蒼として、白い露は霜となりはてる
私が思うあの人は、この水の彼方にある
河をさかのぼって（陸路で）行こうとすれば、道は隔たって且つ長い
流れに沿って下ろうとすれば（流れを下るだけだから行くのは容易いけれども）、あなたの幻が水の中に見える（近くにいるのに却って手が届かない。）

水辺の葦はびっしりと繁り、朝の露もまだかわいていない
私が思うあの人は、この河の岸辺にいる
河をさかのぼって陸を行こうとすれば、道は険しくつらい上り
流れに沿って河をくだろうとすれば、あなたの幻が水の中洲に見える

水辺の葦はざわざわと繁り、朝の露もまだ止んでいない
私が思うあの人は、この水の草と水の境目にいる
河をさかのぼって行こうとすれば、道は険しく求めがたい
流れに沿って河をくだろうとすれば、あなたの幻が水の中洲に見える

2 易水歌（戦国時代末 荊軻）*

易	水	歌					荊	軻
yì	shuǐ	gē					jīng	kē
	風	蕭	蕭	兮	易	水	寒	
	fēng	xiāo	xiāo	xī	yì	shuǐ	hán	
	壯	士	一	去	兮	不	復	還
	zhuàng	shì	yí	qù	xī	bú	fù	huán

読み下し文

風蕭蕭として易水寒し
 壯士一たび去りて復た還らず

語句

易水：河名。現在の河北省県にあり、当時は楚と燕の南の境界であった。
 蕭蕭：秋風の音。
 兮：古詩に用いられる文末詞。現代語の“啊”“呀”などに相当する。
 例）虞兮虞兮奈若何。（Yú xī yú xī nài ruò hé）（虞や虞や汝をいかんせん）
 壯士：ここでは荊軻を指す。

現代語訳

北風は蕭々として 易水の水は冷たい
 壯士はひとたび去り 二度と戻ることはない

形式

七言を一句とし、句中または句末に<兮>などの助詞を置いて独特の調子を作る形式。この句形による歌謡は「楚辞体」「楚調」とも言われ、当時大いに流行していたとされる。

* 荊軻（?～前227）：中国、戦国時代の刺客。衛（現在の河南省）の人。『史記 刺客伝』によれば、彼は読書を好み、剣術を善くした。燕国に赴いた際に、燕の太子丹の依頼で、秦王政（始皇帝）を刺そうとして失敗し、殺された。この詩は太子との別れに際し、易水のほとりで作った送別の歌である。

3 垓下歌 (秦末 項羽*)

垓	下	歌				項	羽
gāi	xià	gē				xiàng	yǔ
	力	拔	山	兮	氣	蓋	世
	lì	bá	shān	xī	qì	gài	shì
	時	不	利	兮	騅	不	逝
	shí	bù	lì	xī	zhuī	bù	shì
	騅	不	逝	兮	可	奈	何
	zhuī	bù	shì	xī	kě	nài	hé
	虞	兮	虞	兮	奈	若	何
	yú	xī	yú	xī	nài	ruò	hé

垓下の歌

力 山を抜き 氣 世を蓋ふ
 時 利あらず 騅 (愛馬の名前) 逝かず
 騅の逝かざる 奈何 (いかん) すき
 虞や虞や 若 (なんじ) を奈何せん

語句

垓下 : 現安徽省靈璧県東南部に位置する古戦場。
 兮 : 楚辞などの古詩によく使われる語気詞。句の切れ目を示したり音調を整えるため用いる
 騅 : 筆毛の馬。項羽の愛馬の名前
 逝 : 現代語の<跑> (走る) に同じ。他に、行く、死ぬなどの意味もある
 奈何 : どうしようもない。<可奈何>は反語で「どうしたらよいだろう」「どうしようもない」
 若 : <汝><你>と同じ。そなた、きみ
 虞 : 項羽の愛妾

現代語訳

わたし (項羽) の力は山をも引き抜かんばかりで、氣は世界を覆い尽くさんばかりであるが
 時はわたしに味方せず、愛馬、騅も駆けようとしなない。
 騅が進まなければ、どうしようもない。
 虞よ、虞よ、もはやそなたをどうしようもない

形式

七言を一句とし、句中または句末に<兮>などの助詞を置いて独特の調子を作る形式。この句形による歌謡は「楚辞体」「楚調」とも言われ、当時大いに流行していたとされる。

ひとこと

楚の項羽が劉邦との争いに敗れ、大軍により垓下に追い込まれた時に詠んだ詩。自分を取り囲む軍が故郷楚の歌を歌うのを聞いて、楚の人も皆漢軍に寝返って自分を取り囲む敵になってしまったと思い、覚悟を決めて最後の別れの宴を開いたときに詠んだ歌。この後、虞姫は剣を取って自刃 (じじん)、項羽は少数の部下とともに脱出を敢行するも、官軍に追われ、烏江 (現安徽省和県) で激しい戦いの末に自刃して果てた。

* 項羽: 前232～前202。秦末の武将。名は籍、羽は字。楚の貴族の家柄に生まれる。叔父項梁とともに兵をあげ、劉邦とともに秦を倒し楚王となったのち、劉邦と天下を争うが、垓下の戦いに敗れ自殺する。

4 虞美人歌（秦末 虞美人*）

虞	美	人	歌		虞	美	人
yú	měi	rén	gē		yú	měi	rén
	漢	兵	已	略	地		
	hàn	bīng	yǐ	lüè	dì		
	四	方	楚	歌	聲		
	sì	fāng	chǔ	gē	shēng		
	大	王	意	氣	盡		
	dà	wáng	yì	qì	jìn		
	賤	妾	何	聊	生		
	jiàn	qiè	hé	liáo	shēng		

虞美人歌

漢兵 已に地を略し
 四方 楚歌の聲
 大王 意氣盡く
 賤妾 何ぞ生に聊んぜん

ひとこと

項羽が虞美人に送った辞世の歌「垓下の歌」に唱和して虞美人が詠んだとされる歌である。しかし、項羽の歌が楚調であるのに虞美人の詩は五言詩であり形式が合っていないこと、この時代に五言詩が確立していたかどうか定かではないので、後世の偽作ではないかともされる。

項羽に歌を返した後、虞美人は自刃し果てた。虞美人の血は赤い花となって彼女の墓の上に咲き、舞い踊るようにゆらゆらと揺れていたのが、人々はこれを「虞美人草」と名付けたという。

* 虞美人：秦末の人。虞は姓であるともいい名であるともいう。項羽の寵姫。呉県（江蘇省蘇州市）の名家の娘。項羽出征の折には常に従い陣中に控えていた。垓下の戦いで項羽が漢軍に包圍されると自ら頸動脈を切って自決した。

5 傾城傾國 (漢書)

傾	城	傾	國			李	延	年
qīng	chéng	qīng	guó			lǐ	yán	nián
	北	方	有	佳	人			
	běi	fāng	yǒu	jiā	rén			
	絶	世	爾	独	立			
	jué	shì	ér	dú	lì			
	一	顧	傾	人	城			
	yí	gù	qīng	rén	chéng			
	再	顧	傾	人	國			
	zài	gù	qīng	rén	guó			
	寧	不	知	傾	城	爾	傾	國
	nìng	bù	zhī	qīng	chéng	ér	qīng	guó
	佳	人	再	難	得			
	jiā	rén	zài	nán	dé			

傾城傾國

北方に佳人有り、絶世にして独り立つ、
 一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の国を傾く、
 寧んぞ城を傾け國を傾くと知らざらんや、佳人再びは得難し。

語句

- 佳人 : 美人、佳人。
 絶世 : 世にならぶものがない、最高の
 独立 : 群を抜いている、比類ない
 寧 : 反語の副詞。いづくんぞ。行為や事態が予測を越えて現れる意味。

現代語訳

北方に佳人あり。比類なき絶世の美女。一たび見れば城(街)を滅ぼし、再度見れば国が危うくなる。
 街を滅ぼし国を危うくするとわかっていても、またとない美女なので手にいれようとせずにはられない。

ひとこと

班固『漢書 外戚伝下 孝武夫人伝』によると、前漢の武帝(B.C.140~B.C.88)の時代に李延年という宮廷楽士が、実の妹を宮女として武帝に推薦するために詠んだ詩であるという。武帝は後宮に多くの美女を擁していたが、一人として武帝の寵愛を得たものはいなかった。武帝は再度絶世の佳人を求めたいと願いつつも、願いはかなわずにいた。李延年には李妍という妹がおり、生来あでやかでつつまじやかな美人であり、歌舞にすぐれていた。李延年は彼女を後宮に推薦したいと思ったが、機会がなかった。宮中で酒盛りの最中に、李延年は自作の歌を武帝に披露した。これを聞いた武帝は「この世のどこにそんな佳人がいるのか」と問い、李延年はそれが自分の妹であると伝えることができた。武帝が会ってみるとなるほど確かに比類の無い佳人、傾城傾國であったために、感動し、李延年の妹を妃として、李夫人と号せしめた。彼女は一年後に男子を生んで、病を得て死ぬまで武帝に寵愛されたそうである。

6 子夜四時歌（樂府詩集）

子	夜	四	時	歌	
zǐ	yè	sì	shí	gē	
	秋	風	入	窗	裡
	qiū	fēng	rù	chuāng	lǐ
	羅	帳	起	飄	颺
	luó	zhàng	qǐ	piāo	yáng
	仰	頭	看	明	月
	yǎng	tóu	kàn	míng	yuè
	寄	情	千	里	光
	jì	qíng	qiān	lǐ	guāng

子夜四時歌

秋風 窗裡に入り
 羅帳 起ちて飄颺
 頭を上げて明月を見る
 情を寄す 千里の光

語句

子夜：東晋時代の女性の名前

子夜四時歌：「樂府詩集」には「子夜歌」四十二首、「子夜四時歌」七十五首などが、呉の地方の歌曲として残されている。呉歌ともよばれる。作者は不明であるが、多くは女性の口ぶりで恋愛の情を歌っているとされる。

起：舞い上がって

飄颺：風にひらひらとひるがえる

寄情：胸の思いを寄せる、お願いする

千里光：千里も遠く離れたあの人を照らしている月光。離れ離れになっている二人を結びつけているのは月の光だけだ、月の光にこの思いを千里離れたあの人のところまで届けてほしいという意味。

現代語訳

秋風が窓の中に吹き込んできて
 羅（うすぎぬ）のとぼりが風にひらひら翻る
 頭を上げて明るい月光を眺めては
 この思いを 千里離れたあの人を照らしている月に寄せる

ひとこと

第一句と第三句は李白の「静夜思」に影響を与えているようだ。

7 七歩詩 (魏 曹植*)

七	歩	詩		曹	植
qī	bù	shī		cáo	zhí
	煮	豆	持	作	羹
	zhǔ	dòu	chí	zuò	gēng
	漉	菽	以	為	汁
	lù	shū	yǐ	wéi	zhī
	萁	在	釜	下	燃
	qí	zài	fǔ	xià	rán
	豆	在	釜	中	泣
	dòu	zài	fǔ	zhōng	qì
	本	是	同	根	生
	běn	shì	tóng	gēn	shēng
	相	煎	何	太	急
	xiāng	jiān	hé	tài	jí

七歩詩

豆を煮て 持って羹を作り 豉(し)を漉し以って汁と為す
萁は釜下に在りて然え 豆は釜中に在りて泣く
本は同根より生ず 相煎る 何ぞ太(はなは)だ急なる

語句

七歩詩：兄である魏の文帝(曹丕)に、七歩歩く間に詩を作れなかったら死刑にするとされ作った詩。
本：本来は 太：大変、ひどく 急：はげしい、ひどい

現代語訳：

豆を煮て 羹(肉と野菜のスープ)を作り、豆を漉して汁を作ろうとする
豆殻は釜の下で萌え、豆は、釜の中で熱さに耐えかねて泣く
もとは同じ根から生まれたのに どうしてこんなにグツグツと激しく煮て私を苦しめるのか

* 曹植(192-232) 三国時代、魏の詩人。字名は子建。曹操の三男に生まれる。曹操の政權確立とともに形成された建安(後漢末の年号)の文人集団の最年少として、従来民間歌謡であった五言の形式を知識人の文学形式にまで高め、賦から詩へと文学の主流が転回する道にもっとも大きく寄与したとされる。曹丕の即位後は幽閉同然の身として封地を流浪し、曹丕の死後、曹丕の長子明帝の時代になってもその不遇は変わらず41歳で死去。最後の封地が陳(河南省淮陽県)であったので陳思王とも呼ばれる。

8 詠鵝（初唐、駱賓王*）

yǒng	é			luò	bīn	wáng
咏	鵝			駱	賓	王
	é	é	é			
	鵝	鵝	鵝			
	qū	xiàng	xiàng	tiān	gē	
	曲	項	向	天	歌	
	bái	máo	fú	lǜ	shuǐ	
	白	毛	浮	綠	水	
	hóng	zhǎng	bō	qīng	bō	
	紅	掌	撥	清	波	

鵝を詠む

鵝、鵝、鵝

曲項、天に向かい歌し

白毛、緑水に浮し

紅掌、清波を抜す

日本語訳

があがあがあ。曲がった首は天に向かい歌う。白い羽毛は緑水に浮き、赤い水かきは清波をかく。

* 駱賓王：??～684。初唐詩人。浙江人。王勃、盧照鄰、楊炯とともに「初唐四傑」と称される。

9 登幽州台歌 (初唐 陳子昂*)

登	幽	州	台	歌		陳	子	昂
dēng	yōu	zhōu	tái	gē		chén	zǐ	áng
	前	不	見	古	人			
	qián	bú	jiàn	gǔ	rén			
	後	不	見	來	者			
	hòu	bú	jiàn	lái	zhě			
	念	天	地	之	悠	悠		
	niàn	tiān	dì	zhī	yōu	yōu		
	獨	愴	然	爾	悌	下		
	dú	chuàng	rán	ér	tì	xià		

幽州台に登るの歌

前に古人を見ず
後に來る者を見ず
天地の悠悠たるを念じ
獨り愴然として悌下る

語句

古人 : 昔の人
來者 : 將來の人
悠悠 : 時間と空間の無限の広がり
念 : 心にかける、なつかしく思う
愴然 : かなしみにくれること
悌下 : なみだがこぼれる

現代語訳

私の前に行く古人に会う事はできない。
私の後から來るであろう未來の者を見ることもない。
高台に登り、天地と時間の無限の広がり思い、
有限の人生の儂さと孤独の悲しみに心を痛め、涙が流れる。

ひとこと

幽州とは現在の北京と河北省の順天、永平、及び遼寧省の西北一帯を含む広大な地を指した。北方幽昧の地にあるので幽州と言う。幽州台は現在の北京にあったとされる高台であるが、現在の北京とは異なり、北方防衛のための最前線の軍事拠点であったと思われる。作者は当時契丹征討の參謀としてこの地にあった。戦場での緊張感に加え、失意と孤独の中で詠まれた詩である。

詩の形式は、前の二句は五言、後の二句は六言という破格で、雜言古詩と呼ばれる。押韻 (第2句と第4句) も独特であり、盛唐の詩とは異なる風格を持つ。

* 陳子昂 (661?-702?) 字名は伯玉。梓州射洪 (四川省射洪県) の人。裕福な家に生まれ、24歳で進士となる。則天武后に認められ、麟台正字、右拾遺をつとめる。參謀として從軍し、西北、燕京方面に赴いた。政治上の主張が容れられず、職を辞して歸郷するが、陳家の財産に目をつけた県令に陥れられ獄死。『陳伯玉集』がある。詩風は質実で力強く、盛唐詩の先駆けとして評価される。

10 涼州詞（盛唐 王翰*）

涼	州	詞				王	翰
liáng	zhōu	cí				wáng	hàn
	葡	萄	美	酒	夜	光	杯
	pú	táo	měi	jiǔ	yè	guāng	bēi
	欲	飲	琵	琶	馬	上	催
	yù	yǐn	pí	pá	mǎ	shàng	cūi
	醉	臥	沙	場	君	莫	笑
	zuì	wò	shā	chǎng	jūn	mò	xiào
	古	來	征	戰	幾	人	回
	gǔ	lái	zhēng	zhàn	jǐ	rén	huí

涼州詞

葡萄の美酒夜光の杯。飲まんと欲して琵琶馬上に臥す。
 醉ひて沙場に臥す君笑ふことれ、古來征戰幾人か回る。

語句

涼州詞：涼州は今の甘肅省武威市。涼州詞とは唐代の樂府名。地名を詞の題としたいわれは、地方官が当地の流行歌を採集して朝廷にすすめたことによる。詩人たちはその曲調に合わせて詩を作った。「涼州詞」という題を借りて、征戰の苦を叙したものである。

欲飲：まさに酒を飲もうとしたとき。“欲”は將然を表す。

琵琶馬上：「馬上琵琶」の倒文。琵琶とは馬上で弾く樂器である。

君：特定の人を指すのではない「あなた」「あなたがた」。

莫：現代語の“不要”。～しないでくれ。

幾人回：反語による否定の感情を強める。戻った者は殆どいない。

現代語訳

葡萄の美酒を夜光の玉杯に注ぎまさに飲もうとする。

興を催して琵琶を馬上で弾じ、大酔してそのまま沙場に倒れ伏してしまった。君はどうかこの無作法を笑わないでほしい。

古來この地に征戰に來た者は多いけれど、無事に生還したものは何人もいないではないか。明日の命をも知れない身であれば、酒を飲み一時の歡樂に身を任せたとしても誰が諷ることができようか。

* 王翰（687ころ～726ころ？）中国、盛唐の詩人。晋陽（山西省）の人。字は子羽。711年（景雲2）の進士。宰相張説に礼遇され秘書正字や賀部員外郎に拔擢されたが、張説が宰相をやめると左遷され、最後は道州（湖南省）司馬で終わった。壮麗な詩風に特徴がある。

11 春曉 (盛唐 孟浩然*)

春	曉		孟	浩	然
chūn	xiǎo		mèng	hào	rán
	春	眠	不	覺	曉
	chūn	mián	bù	jué	xiǎo
	處	處	聞	啼	鳥
	chù	chù	wén	tí	niǎo
	夜	來	風	雨	聲
	yè	lái	fēng	yǔ	shēng
	花	落	知	多	少
	huā	luò	zhī	duō	shǎo

春曉

春眠曉を覚えず
处处啼鳥を聞く
夜來風雨の聲
花落つること知んぬ多少ぞ

語句

曉 : 夜明け
聞 : 自然にきこえてくる
啼鳥 : 鳴く鳥の聲
夜來 : 昨夜 (來、に意味はない)
不覺 : わからない、知らない。
多少 : ①多い、たくさん、②少ない、少し、③疑問を表す、どのぐらい

現代語訳

春の夜の眠りは心地よく、朝が来たのにも気づかなかった。あちこちで鳥が啼くのが聞こえて目が覚めた。昨夜は一晩中、雨まじりの風が吹いていたが、花はどれくらい散ってしまっただろうか。

* 孟浩然 (689-874) : 中国、盛唐の詩人。浩然是字名。一説に、名が浩で字が浩然ともいう。襄州襄陽 (湖北省陽州市) の人。一生を不遇のうちに過ごす、王維とともに「王孟」と並称され、山水自然派の詩人として日本でも著名な作品が多い。

12 従軍行（盛唐 王昌齡*）

從	軍	行				王	昌	齡
cóng	jūn	xíng				wáng	chāng	líng
	青	海	長	雲	暗	雪	山	
	qīng	hǎi	zhǎng	yún	àn	xuě	shān	
	孤	城	遙	望	玉	門	關	
	gū	chéng	yáo	wàng	yù	mén	guān	
	黃	沙	百	戰	穿	金	甲	
	huáng	shā	bǎi	zhàn	chuān	jīn	jiǎ	
	不	破	樓	蘭	終	不	還	
	bù	pò	lóu	lán	zhōng	bù	huán	

従軍行

青海の長雲雪山暗し 孤城遙かに望む玉門関
 黄砂の百戦金甲を穿つ 桜蘭を破らざれば終に還らず

語句

青海 :湖水の名
 雪山 :天山の一名
 玉門関 :漢土と西域との境にある関所
 黄沙 :砂漠
 樓蘭 :西域の國名。タリム盆地東部のオアシス都市。シルクロードの要衝として繁栄したが、ロプノール湖の移動により衰退し、七世紀には廃墟と化した
 終 :始終、最後まで。“死”と同義であるが、これを婉曲に表した

現代語訳

青海から天山にかけて漢々と長くたなびく雲により陰鬱な景色が愁をさそう。
 災害の孤城に登り遙か故郷の方にある玉門関をのぞみいっそうのやるせなさが募る。
 黄砂を帯びた沙漠の胡地に入って久しく、その間実に百度の苦戦に遭い、金の鎧も破れて孔があいてしまったが、樓蘭を破らなければ故郷に帰ることはないのである。

ひとこと

王昌齡の辺塞詩の名作として七言絶詩「従軍行三首」がある。この詩はその第二にあたり、辺境にとどまる孤絶感と激しい闘志を詠む。

* 王昌齡（700-755ごろ?）：中国、盛唐の詩人。字は少伯。京兆（陝西省西安市）、あるいは江寧（江蘇省南京市）の出身ともいう。37歳のころ進士に及第して官職についたが、奔放な性格のためやがて地方に左遷。その後も中央復帰と左遷を繰り返した。安祿山の乱の時に郷里に戻るも、刺史の間丘曉に憎まれ殺された。邊塞詩や閨怨詩、離別詩に名作が多い。『王昌齡集』がある。

13 渭城曲 (盛唐 王維*)

渭	城	曲			王	維	
wèi	chéng	qǔ			wáng	wéi	
	渭	城	朝	雨	浥	輕	塵
	wèi	chéng	zhāo	yǔ	yì	qīng	chén
	客	舍	青	青	柳	色	新
	kè	shè	qīng	qīng	liǔ	sè	xīn
	勸	君	更	盡	一	杯	酒
	quàn	jūn	gèng	jìn	yì	bēi	jiǔ
	西	出	陽	關	無	故	人
	xī	chū	yáng	guān	wú	gù	rén

渭城の曲

渭城の朝雨 輕塵を浥す
客舍青青 柳色新たなり
君に勸む 更に尽くせ一杯の酒
西のかた陽関を出ずれば故人無からん。

語句

渭城 : 秦代の首都咸陽を漢代に渭城と改めた。長安の郊外西北、渭水の北岸に位置する
浥 : 湿らせる、潤す
客舍 : 旅店、はたご
柳色 : 柳の色。人との別れを惜しむ時には、柳の枝を輪にして贈る習慣があった
陽關 : 今の甘肅省敦煌の西南にある関所。玉門關とともに西域への要道であった。詳しい位置は不明
故人 : 昔からの友人、旧友

現代語訳

明け方に降った雨が渭城の町の土埃を洗い流して空気を湿らせる
旅店の柳の葉も雨に洗い流されて青青として鮮やかである
君、さあもう一杯送別の酒を飲み干したまえ。
西にある陽関を過ぎてしまえば、もう古くからの友人には会えないのだから。

* 王維 (699? ~ 761頃) 盛唐の詩人。字は摩詰。尚書右丞となったので王右丞と称される。太原祁 (山西省晋中市祁研の人。母親は熱心な仏教徒で、王維の名字は「維摩詰經」にちなむ。容姿すぐれた才人として高名で、詩のほか書や画や琴をよくしたとされる。

ひとこと

(1) この詩は別名「送元二使安西」（元二の安西に使用するを送る）という詩題でも知られている。“元二”というのは、元という姓の家の二番目の人、という意味であり、作者王維の旧友。彼が安西都護府（現在の新疆庫車県）へ旅立つにあたり、見送りのために同行して、旅館で酒を酌み交わした一幕を詩にしたのか。中国には「送君千里総有離別」（君を千里送るとも総じて離別有り）という諺があり、旅立つ人を見送るという行為は、旅人とともに目的地まで中途の一日か二日の距離を同行することであった。

(2) この詩は「陽關曲」とも言われ、古くは曲に合わせて歌われていたと考えられている。朗読や吟詠の際には「陽關三疊」という歌い方、つまり、結句を歌い終えた後に結句をさらに三度繰り返す慣習がある。聞き覚えのある「西陽關を出れば故人なからん、なからん、なからん、故人なからん」の箇所は有名。中国語では以下のように朗読される。西出陽關無故人。無無無故人。

14 鹿柴 (盛唐 王維*)

鹿	柴			王	維
lù	chái			wáng	wéi
	空	山	不	見	人
	kōng	shān	bù	jiàn	rén
	但	聞	人	語	響
	dàn	wén	rén	yǔ	xiǎng
	返	景	入	深	林
	fǎn	jǐng	rù	shēn	lín
	復	照	青	苔	上
	fù	zhào	qīng	tái	shàng

鹿柴

空山 人を見ず
但だ人語の響きを聞くのみ
返景 森林に入り
復た 青苔の上を照らす

語句

鹿柴：鹿の出入りを防ぐ柵。王維の別荘があった陝西省長安郊外綢川の景勝二十のうちのひとつ。
空山：人気のない寂しい山
但：ひたすら、…だけ
人語響：人の話し声がこだまして聞こえる。姿は見えないがどこかに人がいる。
返景：返は返す、戻すの意味。景は影に同じ。夕日の照り返し。
復：ふたたび、そして

現代語訳

静かな人気のない山なのに人の声がどこからか聞こえる。夕日の照り返しが深林に差し込み、青々とした苔の上に光の影を落としている。

ひとこと

人の姿は見えないが人の気配はする、という表現で静けさを強調している。森林の緑、夕日の赤い光が暗い森林に差し込みそこだけ青々と光る情景の鮮やかさとは対照的である。

* 王維 (699? ~761頃) 盛唐の詩人。字は摩詰。尚書右丞となったので王右丞と称される。太原祁 (山西省晋中市祁研の人。母親は熱心な仏教徒で、王維の名字は「維摩詰經」にちなむ。容姿すぐれた才人として高名で、詩のほか書や画や琴をよくしたとされる。

15 相思（盛唐 王維*）

相	思	王	維	
xiāng	sī	wáng	wéi	
紅	豆	生	南	國
hóng	dòu	shēng	nán	guó
春	來	發	幾	枝
chūn	lái	fā	jǐ	zhī
願	君	多	采	擷
yuàn	jūn	duō	cǎi	xié
此	物	最	相	思
cǐ	wù	zuì	xiāng	sī

紅豆

紅豆 南国に生じ
 春来 幾枝か発す
 願わくは君 多く採りつめよ
 此の物 最も相思わしむ

語句

相思 : 思いをよせる、恋人
 紅豆 : あずき的一种。トウアズキ。「相思豆」とも言われる
 此 : これ、この。現代語の「这, 这个」にあたる

現代語訳

紅い豆は恋の花 南の国に育ちました
 春が来ると 幾枝にも実を結びます
 どうか君よ たくさんお摘みなさい
 これは思いを突らせるものだから

ひとこと

異国情緒あふれる色鮮やかなイメージの中で語られる恋の詩である。この詩がモチーフとなって「南海姑娘」「紅豆」などさまざまな歌謡曲が作られ歌われている。

* 王維（699? ~761頃）盛唐の詩人。字は摩詰。尚書右丞となったので王右丞と称される。太原祁（山西省晋中市祁研の人。母親は熱心な仏教徒で、王維の名字は「維摩詰經」にちなむ。容姿すぐれた才人として高名で、詩のほか書や画や琴をよくしたとされる。

16 黄鶴樓 (盛唐崔顥*)

黄	鶴	樓				崔	顥
huáng	hè	lóu				cuī	hào
	昔	人	已	乘	黄	鶴	去
	xī	rén	yǐ	chéng	huáng	hè	qù
	此	地	空	余	黄	鶴	樓
	cǐ	dì	kōng	yú	huáng	hè	lóu
	黄	鶴	一	去	不	復	返
	huáng	hè	yí	qù	bú	fù	fǎn
	白	雲	千	載	空	悠	悠
	bái	yún	qiān	zǎi	kōng	yōu	yōu
	晴	川	歷	歷	漢	陽	樹
	qíng	chuáng	lì	lì	hàn	yáng	shù
	芳	草	萋	萋	鸚	鵒	洲
	fāng	cǎo	qī	qī	yīng	wǔ	zhōu
	日	暮	鄉	關	何	處	是
	rì	mù	xiāng	guān	hé	chù	shì
	煙	波	江	上	使	人	愁
	yān	bō	jiāng	shàng	shǐ	rén	chóu

黄鶴樓

昔人已に白雲に乗じて去り 此の地空しく余す黄鶴樓
 黄鶴一たび去りて復た返らず 白雲 千載 空しく悠悠
 晴川歴々たり漢陽の樹 芳草 萋萋 (せいせい) たり 鸚鵒洲
 日暮 郷関 何れの處か是なる 煙波 江上 人をして愁へしむ

語句

黄鶴樓：現在の湖北省武昌蛇山にあった。言い伝えによると、仙人が黄鶴に乗ってこの地で憩うたことに由来するという。

昔人：伝説中の仙人を指す。 歴歴：ありありと。はっきりわかっている様子。

漢陽：武昌の西にあって、黄鶴樓をよく望むことができる。 萋萋：生い茂る様子。

鸚鵒洲：長江にある中洲。黄祖がここで彌衡を殺した。彌衡がかつて鸚鵒の賦を詠んだことに因んで鸚鵒洲と名付けられた。

* 崔 (704-754)、卞州 (現河南省開封市) の人。進士。若い時は酒色を好み艶麗な詩を書いたが、太原 (山西省太原市) の河東節度使の幕僚となり辺塞を経験したことで詩風が変わる。晩年に書かれたとされる「黄鶴樓」は唐七言律詩中の絶唱として名高い。

現代語訳

昔仙人が黄色い鶴に乗ってこの地を去ったが、今この地にはただ黄鶴楼だけが空しく残る。黄鶴は仙人を乗せ飛び去って、二度とこの世に帰って来ないが、天上の白雲は千年を隔てた今も、遠く漂い長く変わることがない。楼に上り眺望すれば、晴れ渡った空の下、長江対岸の漢陽の樹木がもりもり立ち並んでいるのが見え、中洲の鸚鵡洲には芳草が生い茂り大変良い景色である。鸚鵡の賦を作った彌衡は既にこの世になく、懐古の情に堪えないでいるうちに、知らず知らずのうちに日が暮れて、我が故郷はどこにあるのか見えるはずもなく、長江の川面を煙のように覆う霧が私の愁いをかきたてるばかりである。

17 静夜思 (盛唐 李白*)

静	夜	思		李	白
jǐng	yè	sī		lǐ	bái
	牀	前	看	月	光
	chuáng	qián	kàn	yuè	guāng
	疑	是	地	上	霜
	yí	shì	dì	shàng	shuāng
	舉	頭	望	山	月
	jù	tóu	wàng	shān	yuè
	低	頭	思	故	鄉
	dī	tóu	sī	gù	xiāng

静夜思

床前 月光を見る
疑ふらくは是れ地上の霜
頭を挙げて山月を望み
頭を低れて故郷を思ふ

語句

床：寝台

疑是：～ではないかと思った。現代語の“以为”に相当する

現代語訳

静かな夜、ふと寝台の前に白く射し込む月光を見て
これは霜が降ったのだろうかかと疑ったが、よく見れば霜ではない
ふりあおいでそれが山の上にかがやく月の光であることを知り
月を見ることによって、うつむいてつくづく故郷をなつかしく思い出した

ひとこと

主に李白の内省的情景を詠った詩であるが、きらきらひかる月の光のひろがりとともに視線も動き、四句目で再び内面へと沈み込んでいく。立体的かつ重層的な流動感を味わいたい。
楽府の「子夜四時歌」も参考にしてほしい。

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉 (スヤブ、キルギス共和国トクマク) に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

18 早發白帝城（盛唐 李白*）

早	發	白	帝	城	李	白
zǎo	fā	bái	dì	chéng	lǐ	bái
朝	辭	白	帝	彩	雲	間
zhāo	cí	Bái	dì	cǎi	yún	jiān
千	里	江	陵	一	日	還
qiān	lǐ	Jiāng	líng	yí	rì	huán
兩	岸	猿	聲	啼	不	住
liǎng	àn	yuán	shēng	tí	bú	zhù
輕	舟	已	過	萬	重	山
qīng	zhōu	yǐ	guò	wán	chóng	shān

早に發つ白帝城

朝に辭す白帝 彩雲の間
 千里の江陵 一日に還る
 兩岸の猿声 啼いて住らざるに
 輕舟已に過ぐ 萬重の山

語句

白帝城：四川省の東、揚子江の北岸、白帝山上にあった城。蜀の昭烈帝（劉備）が崩じた所である

現代語訳

朝早くに彩雲たなびく白帝城を出発。千里離れた江陵まで一日で帰ることができる。そのように速く帰ることができたのは、江流が早いからである。
 兩岸の猿聲が一声「キャッ」と啼いてその声が尾を引いて啼きやまぬうちに、輕やかな小舟は幾万に重なる山々の間を一気に通り過ぎてしまう。

ひとこと

朝早くに船で白帝城を出発したことを詠んだ。猿の啼き声により小舟の速さが強調されている。また、句中に、“白帝—彩雲”、“千里—一日—萬重”のような対応が見られることも、詩の趣を深くしている。

* 李白（701--762）盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉（スヤブ、キルギス共和国トクマク）に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

19 黄鶴樓送孟浩然之廣陵 (李白*)

黄	鶴	樓	送	孟	浩	然	之	廣	陵
huáng	hè	lóu	sòng	mèng	hào	rán	zhī	guǎng	líng
								李	白
								lǐ	bái
		故	人	西	辭	黄	鶴	樓	
		gù	rén	xī	cí	huáng	hè	lóu	
		煙	花	三	月	下	揚	州	
		yān	huā	sān	yuè	xià	yáng	zhōu	
		孤	帆	遠	影	碧	空	盡	
		gū	fān	yuǎn	yǐng	bì	kòng	jìn	
		唯	見	長	江	天	際	流	
		wéi	jiàn	cháng	jiāng	tiān	jì	liú	

黄鶴樓にて孟浩然の廣陵に之 (ゆ) くを送る

故人西のかた黄鶴樓を辭し、煙花三月揚州を下る

孤帆の遠影、碧空に盡き、唯だ見る長江の天際に流るるを

語句

黄鶴樓：湖北省武漢市にある樓名

孟浩然：盛唐詩人。李白の友人

之：行く、至る

廣陵：揚州の古称

故人：旧友。ここでは孟浩然を指す

煙花：春霞の中の美景

下：都から次第に離れ去ること

揚州：江蘇省にある市。風流繁華な所として知られる

孤帆：一艘だけ浮かぶ帆掛け船

盡：吸い込まれるように消えゆく

唯：ただ、…のみ (現代語の“只”に相当)

天際：天と地の相接する空の果て、地平線

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉 (スヤブ、キルギス共和国トクマク) に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

現代語訳：

旧友孟浩然が、今まさに西にある黄鶴楼を辞し、のどかな花煙の三月に舟に乗って東の繁華な揚州へ下ろうとしている。私はそれを黄鶴楼の上から見送るが、唯ひとつの帆影はとうとう天の碧色と混じり地平線の彼方に消えてしまった。詩人はそこを離れ難く、長江が遠く天が尽きるまで流れるのを見ていた。

20 秋浦歌 (盛唐 李白*)

秋	浦	歌			李	白
qiū	pǔ	gē			lǐ	bái
	白	髮	三	千	丈	
	bái	fà	sān	qiān	zhàng	
	緣	愁	似	箇	長	
	yuán	chóu	sì	gè	cháng	
	不	知	明	鏡	裡	
	bù	zhī	míng	jìng	lǐ	
	何	處	得	秋	霜	
	hé	chù	dé	qiū	shuāng	

秋浦の歌

白髮三千丈。愁に緣(よ)りて 箇(かく)の似(ごと)く長し
知らず明鏡の裡(うち)。何れの處よりか 秋霜を得たる

語句

- 秋浦 : 唐代の池州府秋浦県。今の安徽省貴池西
白髮 : 白髮。老年をも指す
丈 : 長さの単位。一丈は約3.3m
緣 : …ゆえに
似箇 : このように。“似个”は“如此”の俗語。現代語の“这样zhèyàng, 这般zhèbān”に相当
明鏡 : 澄みきった鏡
何處 : どこ。現代語の那里nàlǐに相当
秋霜 : 頭髪が白いことを秋の霜に例えた

現代語訳

鏡に照らしてみると、白髪が三千丈はあろうかというほど長くのびていた。これは我が心に積もる愁のためになつたのであろうか。今日鏡を見るまでは思いもしなかつたことで不思議で仕方が無い。それにしても明鏡の中の秋の霜(白髪)は一体どこからやってきて俺の頭に乗つたのであろうか。

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉(スヤブ、キルギス共和国トクマク)に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

ひとこと

李白が秋浦に客として留まっていた時、己の老いたことを嘆いて詠んだ「白髮三千丈」はあまりにも有名である。「秋浦歌」は十七首連作であり、これはその第十五首である。第四作に「両鬢入秋浦、一朝颯已衰。猿聲催白髮。長短尽成絲」（両鬢秋浦に入り、一朝にしてとして已に衰ふ、猿聲白髮を催し、長短盡く絲と成る）のようにあるのと呼応している。

21 子夜呉歌 (盛唐 李白*)

子	夜	吳	歌		李	白
zǐ	yè	wú	gē		lǐ	bái
	長	安	一	片	月	
	cháng	ān	yí	piàn	yuè	
	萬	戶	擣	衣	聲	
	wàn	hù	dǎo	yī	shēng	
	秋	風	吹	不	盡	
	qiū	fēng	chuī	bú	jìn	
	總	是	玉	關	情	
	zǒng	shì	yù	guān	qíng	
	何	日	平	胡	虜	
	hé	rì	píng	hú	lǚ	
	良	人	罷	遠	征	
	liáng	rén	bà	yuǎn	zhēng	

子夜呉歌

長安 一片の月 萬戸 衣を擣つ聲
秋風 吹いて盡きず 總べて是れ 玉關の情
何れの日か 胡虜を平らげ 良人 遠征を罷めん

語句

子夜呉歌：東晋時代に子夜という女性の歌手がいた。東晋は吳の地にあつたので、その曲を呉歌と行った。このメロディに合わせて多くの詩人が詩（楽譜）を作った。李白はこの曲の趣を生かして「子夜呉歌」を作った

擣衣聲：布に艶を出すためい砧に乗せて木槌で布を叩く音

吹不盡：いつまでも吹き止まない

總是：すべて

玉關情：聖域への出口にあたる玉門関を超えて西域との戦いに出ている自分の夫を思い出す妻の心

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、西域の碎葉（スヤブ：キルギス共和国トクマク）に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

現代語訳

長安の夜空にひとひらの月が浮かんでいる。長安の全ての家々から砧を打つ音が響いてくる。
秋風は街中に吹き寄せて吹きやむこともない。月の輝き、砧の音、秋の風全てが玉関のあなたに出征して
いる夫を思い出させる。
いつになったら外敵を征伐して、夫は遠征をやめて帰ってくるのだろうか。

22 峨眉山月歌 (盛唐 李白*)

峨	眉	山	月	歌				李	白
é	méi	shān	yuè	gē				lǐ	bái
		峨	眉	山	月	半	輪	秋	
		é	méi	shān	yuè	bàn	lún	qiū	
		影	入	平	羌	江	水	流	
		yǐng	rù	píng	qiāng	jiāng	shuǐ	liú	
		夜	發	清	溪	向	三	峽	
		yè	fā	qīng	xī	xiàng	sān	xiá	
		思	君	不	見	下	渝	州	
		sì	jūn	bú	jiàn	xià	yú	zhōu	

峨眉山月の歌

峨眉山月 半輪の秋

影は平羌 (へいきょう) 江水に沿って流る

夜 清溪を發して 三峽に向ふ

君を思へども見えず 渝州に下る

語句

峨眉山 : 四川省峨眉の東南にある山。二つの峰が向かい合って蛾の眉のように見えるからこのように言う。また女性の眉を「蛾尾」ということから、ここでは女性を指しているともされる

半輪 : 上弦すなわち陰曆七八日頃の月

影 : 月の光、もしくは水に映る月の姿

平羌江 : 峨眉山の北側を流れる川の古い呼び名。諸葛亮孔明が羌夷をここで平定したのでこう呼ぶ

三峽 : 四川省から湖北省にかけての大渓谷。途中三つの渓谷があるのをまとめて「三峽」という

清溪 : 宿駅の名。四川省漢源県

思君 : 君は月を指す。月の他にも、誰か密かに思う人を指すかとも思われる

渝州 : 今の重慶

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉 (スヤブ、キルギス共和国トクマク) に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

現代語訳

秋の峨眉山の上に半輪の月出ている。月影は江水の流れに映り、また平羌江の激しい流れに浮かんで流れていく。私は夜、清溪から舟出して三峡のほうに向かおうとしているが、兩岸の山が迫って高いために、宵のうちに少し見えた月もやがて見えなくなってしまった。今一度君を見たいと思っていたが、遂に見ることができず、とうとう見ないまま渝州まで下ってしまった。

ひとこと

地図で、峨眉山→清溪→渝州→三峡の場所を確認してみましょう。

23 春夜宴桃李園序 (盛唐 李白*)

春	夜	宴	桃	李	園	序					李	白
chūn	yè	yàn	táo	lǐ	yuán	xù					lǐ	bái
夫	天	地	者	萬	物	之	逆	旅				
fū	tiān	dì	zhě	wàn	wù	zhī	nì	lǚ				
光	陰	者	百	代	之	過	客					
guāng	yīn	zhě	bǎi	dài	zhī	guò	kè					
爾	浮	生	若	夢		爲	歡	幾	何			
ér	fú	shēng	ruò	mèng		wèi	huān	jǐ	hé			
古	人	乘	燭	夜	遊		良	有	以	也		
gǔ	rén	bǐng	zhú	yè	yóu		liáng	yǒu	yǐ	yě		
況	陽	春	召	我	以	煙	景					
kuàng	yáng	chūn	zhào	wǒ	yǐ	yān	jǐng					
大	塊	假	我	以	文	章						
dà	kuài	jiǎ	wǒ	yǐ	wén	zhāng						
會	桃	李	之	芳	園		序	天	倫	之	樂	事
huì	táo	lǐ	zhī	fāng	yuán		xù	tiān	lún	zhī	lè	shì
群	季	俊	秀		皆	爲	惠	連				
qún	jì	jùn	xiù		jiē	wèi	huì	lián				
吾	人	詠	歌		獨	慚	康	樂				
wú	rén	yǒng	gē		dú	cán	kāng	lè				
幽	賞	未	已		高	談	轉	清				
yōu	shǎng	wèi	yǐ		gāo	tán	zhuǎn	qīng				

* 李白 (701--762) 盛唐の詩人。字は太白、号は青蓮居士。生地には諸説ある。現行の中国の通説では、聖域の碎葉 (スヤブ、キルギス共和国トクマク) に生まれ、一家とともに蜀の青蓮郷に移住したとされる。若い頃は任侠を好み、四川を振り出しに江南、山東、山西を遊歴する。科挙を受験した形跡はない。42歳の時に玄宗の朝廷に召されて翰林供奉となるも高力士に憎まれ讒言によって朝廷を追われた。安祿山の乱に際して永王の側についたために貴州に流される。大赦にあうも各地を放浪するうちに安徽省で病を得て死んだとされている。享年62歳。自由奔放で豪快な詩風。杜甫とともに中国最高の詩人とされ、杜甫は「詩聖」、李白は「詩仙」と称せられる。

開	瓊	筵	以	坐	花	飛	羽	觴	爾	醉	月
kāi	qióng	yán	yǐ	zuò	huā	fēi	yǔ	shāng	ér	zuì	yuè
不	有	佳	作	何	伸	雅	懷				
bù	yǒu	jiā	zuò	hé	shēn	yǎ	huái				
如	詩	不	成	罰	依	金	谷	酒	數		
rú	shī	bù	chéng	fá	yī	jīn	gǔ	jiǔ	shù		

春夜 桃李園に宴するの序

夫れ天地は萬物の逆旅にして 光陰は百代の過客なり
 而るに浮生は夢の若し 歡（よろこび）を為すこと幾何（いくばく）ぞ
 古人 燭を乗（と）りて夜遊ぶこと 良（まこと）に以（ゆえ）有る也
 況んや陽春我を召くに煙景を以てし 大塊我に假すに文章を以てす
 桃李の芳園に會し 天倫の樂事を序す
 群季の俊秀皆惠連爲り 吾人の詠歌は独り康樂に慚（は）ず
 幽賞未だ已まず 高談轉（うたた）清し
 瓊筵を開き以て花に坐し 羽觴を飛ばし月に酔ふ
 佳作有らずんば何ぞ雅懷を伸べん
 如し詩成らずんば罰は金谷の酒の數に依らん

語句

逆旅：逆は迎えるの意味。①旅客を迎えるところ、旅館。②旅をすること。旅。ここでは①の意味か。
 過客：行き来する人、行きすぎる人、旅人
 光陰：時間、百代：きわめて長い年月、永遠
 浮生：はかない人生。莊司「其生如浮、其死如流」とあり。
 乘燭夜遊：「古詩十九首 生年不滿百」（後漢、作者不詳）に曰く「生年不滿百 常懷千歲憂 昼短苦夜長 何不乘燭遊」（生年は百に満たず、常に千歳の憂いを懐く 昼は短く夜の長きを苦しむ 何ぞ燭を乗りて遊ばざるや）。「遊」は好きなことをして楽しむ意味。
 良有以也：まことに道理あることである。魏文帝の「與吳質書」に曰く「少壯真当努力、年一過往、何可攀援、古人思乘燭夜遊、良有以也」
 大塊：天地。「夫大塊載我以形，勞我以生，佚我以老，息我以死。」（莊子）
 假：借
 天倫：①自然に定まった人と人とのつながり、秩序、②家族間の絆
 群季：多くの弟たち
 俊秀：美しい、眉目秀麗
 惠連：①南宋の文人、謝惠連（397?407?-433?）、族兄の謝靈運の「大謝」に対し「小謝」と称された。
 ②すぐれた弟（謝惠連は文才にすぐれ、族兄の謝靈運に褒められたことによる）。
 康樂：謝靈運は「康樂侯」を襲封している
 幽賞：静かに鑑賞する
 高談：声高に話すこと、思う存分話をする事
 轉：うたた。時が経つにつれて程度がますます激しくなるさま。ますます
 清：心や行いにけがれないさま。清らか。 瓊筵：りっぱな宴
 飛羽觴：羽觴を飛ばす。盃のやりとりをさかんに行う、酒盛りをする
 雅懷：風流な思い
 金谷酒數：酒三斗。晉の石崇が金谷園（河南省洛陽県）に賓客を會して大いにのみ、詩を賦せしめてならぬものには罰として酒三斗を飲ましめた故事による。

現代語訳

そもそも天地とは萬物を迎え入れる旅籠のようなもので、時間は永遠の旅人とも言えるでしょう。

それなのに、人生は夢のようなもので、楽しいことをする時間はどのくらいあるのだろうか（いや、いくらもない）。昔の人は、昼が短く夜が長いことを嘆いて、燭を手に取り夜も好きなことをして励んだという。これは全く道理のあることです。まして、目の前に陽春の煙景があつて、天地は私に文章の才能を与えてくれました。これで楽しむなというほうが無理ではありませんか。

今ことに我々は桃や李の咲きほこるすばらしい庭園に集い、親しい人々との楽しみを序す。ここに集まったみなさまはいずれも若くて眉目秀麗、才能に恵まれた謝恵連と申せましょう。ひとり年長者の私の詩はというと恥ずかしながら康樂（謝恵連のいとこ謝靈運）というにはあまりにもお粗末。心静かにこの景色を鑑賞することはまだ続き、高らかな話し声はますます清らかになる。美しい玉のような筵を敷いて花の中にすわり、さかんに盃のやりとりをして月明かりの下に酔う。良い詩ができなければ心情を表すことはできない。もし詩ができなければ、罰として晋の石崇の金谷園の故事にならって酒三杯を飲ませることにしよう。

24 江陵愁望寄子安（晩唐 魚玄機*）

江	陵	愁	望	寄	子	安		魚	玄	機
jiāng	líng	chóu	wàng	jì	zǐ	ān		yú	xuán	jī
		楓	葉	千	枝	復	萬	枝		
		fēng	yè	qiān	zhī	fù	wàn	zhī		
		江	湖	掩	映	暮	帆	遲		
		jiāng	hú	yǎn	yìng	mù	fān	chí		
		憶	君	心	似	西	江	水		
		yì	jūn	xīn	sì	xī	jiāng	shuǐ		
		日	夜	東	流	無	歇	時		
		rì	yè	dōng	liú	wú	xiē	shí		

江陵にて愁望し 子安に寄す

楓葉千枝 復た萬枝

江湖掩映 暮帆 遲し

君を憶ふ心は西江の水に似たる

日夜東流して 歇む時なし

語句

子安：魚玄機の愛人李憶の字。この詩は、魚玄機が愛人李憶への断ち切り難い慕情の深さを眼前を流れて行く長江の水に託して詠ったもの

現代語訳

楓の葉が幾重にも重なり

江湖をおおいつくさんばかりで船足はゆったり

あなたを思う心はまるで西湖の流れのよう

日夜東に向かって休むことなく流れ続ける

*魚玄機（844ごろ～871ごろ？）中国、唐末の詩人。女性。長安の人。詩文の才能で有名になり女同士となったが、侍女を殺して死刑になったという。森鷗外の小説「魚玄機」の主人公。

25 春望 (盛唐 杜甫*)

春	望					杜	甫		
chūn	wàng					dù	fǔ		
國	破	山	河	在	城	春	草	木	深
guó	pò	shān	hé	zài	chéng	chūn	cǎo	mù	shēn
感	時	花	濺	淚	恨	別	鳥	驚	心
gǎn	shí	huā	jiàn	lèi,	hèn	bié	niǎo	jīng	xīn
烽	火	連	三	月	家	書	抵	萬	金
fēng	huǒ	lián	sān	yuè	jiā	shū	dǐ	wàn	jīn
白	頭	搔	更	短	渾	欲	不	勝	簪
bái	tóu	sāo	gèng	duǎn	hún	yù	bú	shèng	zān

春望

国破れて 山河あり 城春にして 草木深し。
時に感じて 花にも涙を濺ぎ 別れを恨みて 鳥にも心を驚かす
烽火 三月に連なり 家書 万金に抵る
白頭 搔けば更に短く 渾(すべ)て簪(しん)に勝へざらんと欲す。

語句

- 春望 : 春のながめ。“望”は遠くから眺める意。
國 : ここでは首都長安を指す
破 : 建造物が破壊され、社会の秩序が乱れること。
山河 : “国”に対応した自然のこと
城 : 中国の城とは、城壁とそれに囲まれた都市を意味する。
濺 : しきりに涙が流れること
家書 : 家族からの手紙
抵 : 同様の価値がある
白頭 : 白髪頭
搔 : かきむしる。不安な心理を表す
渾 : 現代語の“全”“都”に相当する副詞。全て、全く。例: 渾身の力
欲 : 今にも…しそうである。ここでは意思ではなく未来を表す
不勝 : 耐えられない、…できない
簪 : 冠を髪に留めるピン。簪をすることは役人になることを意味し、もう官職につくことはないだろうという悲しみを表す

* 杜甫 (712-770) 盛唐の詩人。襄陽 (河南省) の人。字は子美、号は少陵。代々官僚を勤めた家柄に生まれるが、科擧次第せず、20代から30代にかけて各地を放浪、44歳の時に安祿山の乱に遭遇する。肅宗のもと一時仕官したが低い身分にとどまり、一時四川に草堂を営むも帰郷を志し、放浪の生活を続ける中、舟上で病没したとされる。唐代のみならず中国最大の詩人として李白と並んで「李杜」と称せられ、詩聖と呼ばれた。

現代語訳

安祿山の乱により国都長安は破壊されてしまったが、山や河は昔のまま残っている。
廃墟と化した城壁の中にも春が来て 草木が深く生い茂る。
戦乱の時世を悲しく感じるためか、花を見ても涙が流れ、
家族との別れを恨めしく思い、鳥のさえずりにも心を痛めている。
戦いの烽火は何ヶ月もの間続き、家族からの手紙は大変貴重なもので万金にも価値する。
苦しみにのたうち白髪頭をかきむしれば髪は一層薄くなり、
もはや冠を留める簪を挿すことさえできなくなりそうだ。

ひとこと

唐玄宗天宝十四（755）年十一月に安祿山が反乱を起こし、翌年長安を占領した。玄宗は蜀に逃れ、玄宗に代わり肅宗が即位したので、杜甫は家族を遺して単身肅宗のもとに赴こうとしたが反乱軍に捉えられ長安に閉じ込められた。「春望」は長安における獄中の作とされている。

26 春夜喜雨 (盛唐 杜甫*)

春	夜	喜	雨		杜	甫
chūn	yè	xǐ	yǔ		dù	fǔ
	好	雨	知	時	節	
	hǎo	yǔ	zhī	shí	jié	
	當	春	乃	發	生	
	dāng	chūn	nǎi	fā	shēng	
	隨	風	潛	入	夜	
	suí	fēng	qián	rù	yè	
	潤	物	細	無	聲	
	rùn	wù	xì	wú	shēng	
	野	徑	雲	俱	黑	
	yě	jīng	yún	ju	hēi	
	江	船	火	獨	明	
	jiāng	chuán	huǒ	dú	míng	
	曉	看	紅	濕	處	
	xiǎo	kàn	hóng	shī	chù	
	花	重	錦	官	城	
	huā	zhòng	jǐn	guān	chéng	

春夜、雨を喜ぶ

好雨時節を知り 春に當りて乃ち發生す
風に隨いて潛に入る夜 物を潤して細やかに聲無し
野徑雲は俱に黒く 江船火は獨り明らかなり
曉に紅の濕れる處を看れば 花は錦官城に重からん

語釈:

時節: 季節 俱: 全部 当: …にあたって、…のときに 乃: すなわち。現代語の“就”に相当。

錦官城: 成都の雅称。錦を管理するための錦官という役所が置かれていたことに由来する。

春雨: 華中地帯はモンスーン気候帯に属し、梅雨がある。

* 杜甫 (712-770) 盛唐の詩人。襄陽 (河南省) の人。字は子美、号は少陵。代々官僚を勤めた家柄に生まれるが、科擧及第せず、20代から30代にかけて各地を放浪、44歳の時に安祿山の乱に遭遇する。肅宗のもと一時仕官したが低い身分にとどまり、一時四川に草堂を営むも歸郷を志し、放浪の生活を続ける中、舟上で病没したとされる。唐代のみならず中国最大の詩人として李白と並んで「李杜」と称せられ、詩聖と呼ばれた。

現代語訳：

恵の雨は時節をわきまえ、春になって待ちかねたように降り出した。

風とともに、密かによるまで入り込み、万物を潤して音も立てず細かく降る。

野の小径は雲とひとつになって闇に沈み、江に浮かぶ船は灯火だけが明るく光る。

明け方、薄紅がしっとり雨に濡れる様を見た。それは、花が重たげに咲き満ちる、錦官城。

27 登岳陽樓 (盛唐 杜甫*)

登	岳	陽	樓		杜	甫			
dēng	yuè	yáng	lóu		dù	fǔ			
昔	聞	洞	庭	水	今	上	岳	陽	樓
xī	wén	dòng	tíng	shuǐ	jīn	shàng	yuè	yáng	lóu
吳	楚	東	南	坼	乾	坤	日	夜	浮
wú	chǔ	dōng	nán	chè	gān	kūn	rì	yè	fú
親	朋	無	一	字	老	病	有	孤	舟
qīn	péng	wú	yī	zì	lǎo	bìng	yǒu	gū	zhōu
戎	馬	關	山	北	憑	軒	涕	泗	流
róng	mǎ	guān	shān	běi	píng	xuān	tì	sì	liú

岳陽樓に登る

昔聞く	洞庭の水	今登る	岳陽樓
吳楚	東南に坼(さ)け	乾坤	日夜浮かぶ
親朋	一字無く	老病	孤舟有り。
戎馬	關山の北	軒に憑りて	涕泗流る

語句

岳陽樓：洞庭湖の東南にある樓。天岳山の南にあるので岳陽樓という
洞庭水：湖南省北部にある湖。かつては中国最大の淡水湖であった
坼：分かれる
乾坤：天地
親朋：親戚や友人
無一字：全く便りのないこと
戎馬：軍馬。戦乱が続くことを指す
憑：よりかかって
軒：手すり
涕泗：なみだ。目から出るのが「涕」、鼻から出るのが「泗」

* 杜甫 (712-770) 盛唐の詩人。襄陽 (河南省) の人。字は子美、号は少陵。代々官僚を勤めた家柄に生まれるが、科擧次第せず、20代から30代にかけて各地を放浪、44歳の時に安祿山の乱に遭遇する。肅宗のもと一時仕官したが低い身分にとどまり、一時四川に草堂を営むも歸郷を志し、放浪の生活を続ける中、舟上で病没したとされる。唐代のみならず中国最大の詩人として李白と並んで「李杜」と称せられ、詩聖と呼ばれた。

現代語訳

昔から洞庭湖の美しい様を聞いてはいた
今始めて岳陽楼に上ってこの湖を目の当たりにし、心を打たれた
呉楚の地はこの湖によって東南に分かれ、湖面には広大な天地が映し出されている
親戚や友人から一通の便りさえなく
年老いて病のある我が身にはただ一艘の舟があるだけ
北方の関所のある山々は今も戦乱が続いているという
流浪の我身、戦乱の続く世など考えて、楼の手すりにもたれて思わず涙がこぼれた

28 絶句 (盛唐 杜甫*)

絶	句			杜	甫
jué	jù			dù	fǔ
	江	碧	鳥	逾	白
	jiāng	bì	niǎo	yú	bái
	山	青	花	欲	然
	shān	qīng	huā	yù	rán
	今	春	看	又	過
	jīn	chūn	kàn	yòu	guò
	何	日	是	歸	年
	hé	rì	shì	guī	nián

絶句

江碧にして 鳥逾白く
山青くして 花燃えんと欲す
今春 看 (みすみす) 又過ぐ
何れの日か 是歸年ならん

語句

欲 : ①ねがう、②…しようとする。ここでは②の意味。
然 : 燃 (もえる) に同じ。

現代語訳

江 (成都を流れる錦江) の水は深緑色で、鳥は真っ白だ
山は濃い青で、花は燃えるように赤い
今年の春もみるみるうちに過ぎようとしている
いつになったら故郷に帰れるのだろう

ひとこと

杜甫の成都での安定した生活は、永泰元年 (765)、節度使嚴武の死とともに終わりを告げ、杜甫は家族を船に乗せて長江を下る。この詩と「登岳陽樓」はその時の作である。杜甫は友人の高適 (707?-765) を頼って東蜀に移ったが、東蜀に着いてみれば高適もすでにこの世の人ではなかった。杜甫はその五年後の大暦五年 (770)、59歳でこの世を去る。

* 杜甫 (712~770) 盛唐の詩人。襄陽 (河南省) の人。字は子美、号は少陵。代々官僚を勤めた家柄に生まれるが、科挙及第せず、20代から30代にかけて各地を放浪、44歳の時に安祿山の乱に遭遇する。肅宗のもと一時仕官したが低い身分にとどまり、一時四川に草堂を営むも帰郷を志し、放浪の生活を続ける中、舟上で病没したとされる。唐代のみならず中国最大の詩人として李白と並んで「李杜」と称せられ、詩聖と呼ばれた。

29 山行（晩唐 杜牧*）

山	行				杜	牧
shān	xíng				dù	mù
	遠	上	寒	山	石	徑
	yuǎn	shàng	hán	shān	shí	jìng
						斜
						xiá.
	白	雲	生	處	有	人
	Bái	yún	shēng	chù	yǒu	rén
						家
						jiā.
	停	車	坐	愛	楓	林
	Tíng	chē	zuò	ài	fēng	lín
						晚
						wǎn,
	霜	葉	紅	於	二	月
	Shuāng	yè	hóng	yú	èr	yuè
						花
						huā

山行

遠く寒山に上れば 石径斜めなり。
 白雲の生ずる處 人家有り。
 車を停め 坐（そぞ）ろに愛す 楓林の晩
 霜葉は 二月の花よりも紅なり。

語彙

石径：石まじりの小道
 坐：そぞろに、なんとはなしに、無心に。
 霜葉：霜に打たれて真っ赤に色づいた葉
 二月花：二月は陰暦の二月。二月花とは通常桃花をいう。
 於（于）：ここでは比較を表す。

“A+形容詞+于（於）+B” の形式で、「AはBより……である」。

例：苛政猛于虎。Kēzhèng měng yú hǔ. 「苛政は虎よりも猛々しい」

現代語では、介詞“比”を用いて次のような語順をとる。

“A+比+B+形容詞” 「AはBより……である」

例：这位哥哥比我大一岁。（『紅樓夢』第3回） Zhè wèi gēge bǐ wǒ dà yí suì.

「こちらのお兄様は私よりも一つ大きいんです。」

古典語の比較を表現する介詞には、“于（於）”の他に、“过（過）”“似”“如”等がある。

* 杜牧（803-852）晩唐の詩人。字は、京兆万年（陝西省西安）の人。書家。晩唐の技巧的な風潮を排して平明で豪放な詩を作る。杜甫の「老杜」に対して「小杜」と称される。

現代語訳

深秋の寒々とした山に入ると、石まじりの山道が続く
驚いたことには、霧の中のこんな深い山奥にも人家があるようだ
車を停めて楓林の山景を無心に見入った
霜で紅葉したあの火のように紅い楓の葉は、遠くに見える初春の桃の花よりももっと紅い

30 江南春（晩唐 杜牧*）

江	南	春			杜	牧
jiāng	nán	chūn			dù	mù
	千	里	鶯	啼	綠	映
	qiān	lǐ	yīng	tí	lǜ	yìng
	水	村	山	郭	酒	旗
	shuǐ	cūn	shān	guō	jiǔ	qí
	南	朝	四	百	八	十
	nán	cháo	sì	bǎi	bā	shí
	多	少	樓	台	煙	雨
	duō	shǎo	lóu	tái	yān	yǔ
						zhōng

江南の春

千里 鶯鳴いて 緑 紅に映ず
 水村 山郭 酒旗の風
 南朝 四百八十寺
 多少の樓台 煙雨の中

語彙

江南：揚子江より南側の中流から下流にかけての地。川や湖沼が多く風光明媚。
 千里：見渡す限り広々とした土地。
 山郭：山沿いの町。
 酒旗：酒屋の目印とする吹き流しの旗。
 多少：どれぐらい、おおくの
 樓台：高い建物、寺院の堂や塔を指している
 煙雨：煙のようにけむる霧雨

現代語訳

広々とした見渡す限りの地にウグイスが鳴き、草木の緑が花の紅に照り映えている
 水辺の村、山辺の町に、酒屋ののぼりが風になびいている
 南朝の時代にはこのあたりには四百八十もの寺があった。
 そのなごりで、たくさんの堂や塔が、煙雨の中に見える

* 杜牧（803-852）晩唐の詩人。字は、京兆万年（陝西省西安）の人。書家。晩唐の技巧的な風潮を排して平明で豪放な詩を作る。杜甫の「老杜」に対して「小杜」と称される。

31 楓橋夜泊 (盛唐 張繼*)

楓	橋	夜	泊		張	繼	
fēng	qiáo	yè	pō		zhāng	jì	
	月	落	烏	啼	滿	霜	天
	yuè	luò	wū	tí	mǎn	shuāng	tiān
	江	村	漁	火	對	愁	眠
	jiāng	cūn	yú	huǒ	duì	chóu	mián
	姑	蘇	城	外	寒	山	寺
	gū	sū	chéng	wài	hán	shān	sì
	夜	半	鐘	聲	到	客	船
	yè	bàn	zhōng	shēng	dào	kè	chuán

風楓夜泊

月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火愁眠に對す
姑蘇城外の寒山寺
夜半の鐘聲客船に到る

日本語訳

月が沈み夜もふけた頃に、烏（カラス）が鳴き、霜の気配が一面に漂っている。
川辺の楓や漁火が、眠れずにいる私の目に映ってくる。
姑蘇城外にある寒山寺からは
夜半を知らせる鐘の音が、この客船にまで聞こえてくる

語句：

楓橋：蘇州城の西北にある閶門の西約5キロのところにかかる橋。
寒山寺：楓橋の近くにある寺の名前

*張繼 (? - ?)：中唐の詩人、政治家。河南省南陽の人。天寶12年(753)の進士、檢校祠部員外郎、洪州塩鉄判官をつとめた。紀行遊覧の詩が多い。47首が現存する。『張祠部詩集』がある。

32 涼州詞（盛唐 王之渙*）

涼	州	詞		王	之	渙
liáng	zhōu	cí		wáng	zhī	huàn
	黃	河	遠	上	白	雲
	huáng	hé	yuǎn	shàng	bái	yún
	一	片	孤	城	萬	仞
	yí	piàn	gū	chéng	wàn	rèn
	羌	笛	何	須	怨	楊
	qiāng	dì	hé	xū	yuàn	yáng
	春	風	不	度	玉	門
	chūn	fēng	bú	dù	yù	mén
						guān

涼州詞

黄河 遠く上る 白雲の間
 一片の孤城 萬仞の山
 羌笛 何ぞ須ひん 楊柳を怨むことを
 春光度らず 玉門關

語句

涼州詞：この詩は「出塞」とも作る。「涼州詞」とは唐代樂府名。「樂府」とは詩の形式の一である。樂府の題を借り、唐代以後に行われた長短句を交えた詩を指す。「涼州詩」「子夜歌」「少年行」も参照
 黄河遠上：黄河の遠く崑崙山より發源し、東流してく下ることを指す
 一片：現代語の「一座」。「一片の月」と同じく、ひとつ、の意味である
 萬仞：非常に高いこと。一仞は八尺もしくは七尺を指す
 羌笛：羌は中国の西北にすむ古代の民族名。西羌ともいう。笛という樂器は本来、西羌より伝来したので、笛のことを指して「羌笛」ともいう
 何須：する必要はない
 怨：悲しく怨みに満ちた樂曲を奏でる意味もある
 楊柳：樂府「横笛曲」中の「折楊柳」を指す。同時にまた柳の木も指す。「折楊柳」とは、人が離別の際に柳を手折って悲しむ曲である
 不度：現代語の「不到」。即ち届かないこと
 玉門關：漢代に甘肅省敦煌の北西80キロに設けられた関所。南西の陽関（「渭城曲」を参照）とともに古来中国から西域に通じる重要な門戸である

* 王之渙（688-742）唐の詩人。并州晋陽（山西省太原市）出身。字は季陵。開元年間の初めに冀州衡水県（河北省）の主簿に就いたが辭職し、15年間無官で過ごし、晩年に文安県（河北省）の尉に就いた。当時、詩名は高く、その詩は人々に愛誦されたと伝えられている。王昌齡や高適などと肩を並べ、辺塞詩が多い。中でも「涼州詞」「登鶴鶴樓」は唐詩中の絶唱とされる。

現代語訳

黄河は遠く崑崙山より発源し、白雲に接して上るところ

そこに唐突に一片の孤城（玉門關）が万仞の高山にそびえる

時折胡人が哀しい「折楊柳」曲を吹いているのが、ここに江南の楊がないことを怨まないでほしい。

関内の春風さえも玉門關に至ることはなく、春風が届かなければ楊が生えることもなく（人もまた同じく玉門關に至ることはないので）、別れをたむけ悲しむ必要はないのだから

33 登鶴雀樓（盛唐 王之渙*）

登	鶴	雀	樓	王	之	渙
dēng	guàn	què	lóu	wáng	zhī	huàn
		白	日	依	山	盡
		bái	rì	yī	shān	jìn
		黄	河	入	海	流
		huáng	hé	rù	hǎi	liú
		欲	窮	千	里	目
		yù	qióng	qiān	lǐ	mù
		更	上	一	層	樓
		gèng	shàng	yì	céng	lóu

鶴雀樓に登る

白日、山に依りて盡き
 黄河、海に入りて流る
 千里の目を窮めんと欲し
 更に上る一層樓

語句

鶴雀樓：鶴雀樓、鶴鵲樓とも書く。鶴鵲、鶴雀ともにコウノトリのこと。山西省永源県にあった三層の樓。脚下に黄河をおき中条山脈に対し、眺望は雄大にして絶佳であったとされる。

依　　： さえぎる、さえぎられること。

欲　　： しようとす。現代語の“想要”に相当。

窮　　： 窮める、のこらず。現代語の“盡”に相当。

千里目： 目は目光、視線のこと。千里眼。どこまでも見通す力。

更　　： ことさら、わざわざ

一層樓： ①ひとつの高樓。②ひとつの階層、一段。ここでは②の意味か

現代語訳

千里の眺めを窮めんとして高樓に上れば、今まさに夕日が山に依って尽きるところまで見え
 黄河が遠く海に入って流れるところまでが見える
 この眺望に満足することなく、大觀をにせんがため
 更にこの樓の一層高いところに上ろうとする

*王之渙（688-742）唐の詩人。并州晋陽（山西省太原市）出身。字は季陵。開元年間の初めに冀州衡水県（河北省）の主簿に就いたが辞職し、15年間無官で過ごし、晩年に文安県（河北省）の尉に就いた。当時、詩名は高く、その詩は人々に愛誦されたと伝えられている。王昌齡や高適などと肩を並べ、辺塞詩が多い。中でも「涼州詞」「登鶴鵲樓」は唐詩中の絶唱とされる。

34 少年行 (吳象之*)

少	年	行		吳	象	之
shào	nián	xíng		wú	xiàng	zhī
承	恩	借	獵	小	平	津
chéng	ēn	jiè	liè	xiǎo	píng	jīn
使	氣	常	遊	中	貴	人
shǐ	qì	cháng	yóu	zhōng	guì	rén
一	擲	千	金	渾	是	膽
yī	zhì	qiān	jīn	hún	shì	dǎn
家	無	四	壁	不	知	貧
jiā	wú	sì	bì	bù	zhī	pín

少年行

恩を承けて借獵す 小平津
氣を使ひて常に遊ぶ 中貴人
一擲千金 渾べて是れ膽
家に四壁無きも 貧を知らず。

語句

少年行：樂府の雜曲の題。樂府とは漢代の音樂を司る役所名。樂府は巷間より歌謠を採取し保存した。唐代には漢代以降の樂府の形式をまねて、伴奏を伴わない詩を作ることが流行した。「涼州詞」「子夜歌」「少年行」などがそうである。

小平津：地名。洛水の津。

使氣：氣に任せて使を為す

中貴人：宮中に奉仕し内臣の位を得た者を言う。

一擲千金：一度に千金もの大金を使って豪遊する。<擲>は「投げる」の意味。

現代語訳

その若者は天子の寵愛を得ているので、小平津という御獵場で自由に獵をすることができる
男伊達を好み血氣盛んなさまで、常に中貴人の権力ある者と交際する
天子様からいただいた金品は、全て自分の友誼を結ぶのに使ってしまう、一度の豪遊で千兩の金を使って
少しも惜しいと思わないのは、その一身が全て胆であるかのようだ
このように湯水のように金を使うのだが、実家は四方に壁がなく赤貧洗うがごとき有様であるということ
すら全く氣にかけないのである

* 吳象之 (生没年不詳) 唐代詩人。樂譜題二首 (「少年行」「陽春歌」) のみを残す。

ひとこと

吳象之は生没年不詳の唐代詩人で、現存する詩はこの「少年行」と「陽春歌」という樂府2首のみです。どちらも若者のきらびやかな姿を描いているようで、実は若者の傲慢さ、身分の高い人々の勢力を嵩にきて派手に遊びまわるが実は実家は貧困に喘いでいる様子などを諷刺しています。

「一擲千金」（一度に大金をばっと使う）という四字熟語も、この詩が出典です。一見心が広くおおらかで、金持ちぶってものごとくにケチケチしないふりをして、実は何の考えもなく、後先考えずに物事を無謀に行うだけの人々やその行為を諷刺するのに使われます。

35 乞巧 (晩唐 林傑*)

乞	巧				林	傑
qī	qiǎo				lín	jié
qī	xī	jīn	xiāo	kàn	bì	xiāo
七	夕	今	宵	看	碧	霄
qiān	niú	zhī	nǚ	dù	hé	qiáo
牽	牛	織	女	度	河	橋
jiā	jiā	qī	qiǎo	wàng	qiū	yuè
家	家	乞	巧	望	秋	月
chuāng	jìn	hóng	sī	jǐ	wàn	tiáo
穿	盡	紅	絲	幾	萬	條

巧を乞ふ

七夕の今宵 碧霄を看る
牽牛織女 河橋を渡る
家家 巧を乞ひて 秋月を望む
穿ち盡す紅絲 幾萬条

語句

乞巧: 旧暦七月七日, 七夕ともいう
碧霄: はてしなく広がる天空
秋月: 旧暦七月は暦の上では巳に秋 (孟秋) である
几万条: たいへん多いことのたとえ

現代語訳

七夕である今宵、果てしない夜空を見上げると
牽牛と織女が天の川にかかる橋を渡っているのが見えるようだ
どの家でも、芸事が上達することを願い、秋の月を見上げる
願いを込めて針に通された赤い糸は何万本ほどになるのだろうか

* 林傑 (831~847)。字は智周、福建の人。唐代詩人。小さい時からたいへん聡明で、6歳で詩を書くことができた。筆を持って文章をすらすらとかき、書や碁にも親しんでいた。死んだときの歳はわずか十七歳。『全唐詩』に二首が収められている。

36 山村（北宋 邵雍*）

山	村	邵	雍
shān	cūn	shào	yōng
	一	去	二
	yī	qù	èr
	三	里	四
	sān	lǐ	sì
	煙	村	五
	yān	cūn	wǔ
	六	家	七
	tiān	jiā	qī
	亭	台	八
	tíng	tái	bā
	九	十	枝
	jiǔ	shí	zhī
	花	八	十
	huā	bā	shí

山村

一たび去（い）けば 二三里
 煙村 四五家
 亭台 六七基
 八九十枝の花

現代語訳

一たび去けば、進むこと二三里
 山村に炊煙立ち上る、四五軒の家
 あずまや六七基
 八九十輪の花

* 邵雍（1011-1077）：北宋の詩人、学者。字は堯夫。范陽（河北省涿県）の人。図象と数学を駆使して独自の宇宙観、歴史哲学を築き上げ、神秘的宇宙観、自然哲学を説き、朱熹らに影響を与えた。しばしば朝廷から招かれたが仕えず、在野の学者として過ごした。著作に『皇極経世』『観物内外篇』など。詩風は平静な心境や幸福感を表したものが多い。詩の代表作として「清夜吟」（五言絶句）がある。

37 春夜 (北宋 蘇軾*)

春	夜				蘇	軾	
chūn	yè				sū	shì	
	春	宵	一	刻	直	千	金
	chūn	xiāo	yī	kè	zhí	qiān	jīn
	花	有	清	香	月	有	陰
	huā	yǒu	qīng	xiāng	yuè	yǒu	yīn
	歌	管	樓	台	聲	寂	寂
	gē	guǎn	lóu	tái	shēng	jí	jí
	鞦	韆	院	落	夜	沈	沈
	qiū	qiān	yuàn	luò	yè	chén	chén

春夜

春宵 一刻 值千金
花に清い香有り 月に陰あり
歌管 樓台 聲寂寂
鞦韆 院落 夜沈沈

語句

春宵：春の夜。「宵」は「よい」ではなく「夜」のことである
千金：①大金、②令嬢、お嬢さん
樓台：高い建物。高樓、高殿。多くは詩歌に用いられる
歌管：「管」は管楽器の総称。
鞦韆：ぶらんこ。
院落：家屋内にある中庭

春の夜

春の夜の素晴らしさは、わずかな時間が千金にも当たるほどに貴重なものである
花は清らかな香りを放ち、月はおぼろに霞んでいる
高殿から聞こえていた歌や音楽も静まってい
ぶらんこのある中庭に、夜はしんしんとふけてゆく

* 蘇軾 (1036-1101) 中国北宋代の政治家、詩人、書家。四川省眉山県生まれ。字は子瞻 (しせん)。号は東坡居士。唐宋八家の一人。父の蘇洵、弟の蘇轍 (そてつ) と合わせて三蘇と呼ばれる。1057年進士に及第して官途につくも神宗 (1048-1085) の重用した王安石 (1021-1086) と衝突して左遷される。44歳の時には新法を批判する詩を作り投獄され、あやうく死刑にされる危機に遭遇した。中国では初の筆禍事件として知られる (「烏代詩案」)。のちに恩赦を得て、黄州に流罪となる。神宗が崩御し哲宗 (1076-1100) 即位、旧法が復活すると側近に起用され礼部尚書に至るが、治世の後半に新法が復活され、晩年の蘇軾は惠州、海南島に流され、大陸への帰去を許された66歳のときに、波乱に富んだ生涯を閉じた。著作に『東坡七集』『東坡詞』『東坡志林』、代表作に「赤壁賦」などがある。

38 水調歌頭（北宋 蘇軾*）

水	調	歌	頭					蘇	軾		
shuǐ	diào	gē	tóu					sū	shì		
明	月	幾	時	有		把	酒	問	青	天	
míng	yuè	jǐ	shí	yǒu		bǎ	jiǔ	wèn	qīng	tiān	
不	知	天	上	宮	闕	今	夕	是	何	年	
bù	zhī	tiān	shàng	gōng	què	jīn	xī	shí	hé	nián	
我	欲	乘	風	歸	去	惟	恐	瓊	樓	玉	宇
wǒ	yù	chéng	fēng	guī	qù	wéi	kǒng	qióng	lóu	yù	yǔ
高	處	不	勝	寒		起	舞	弄	清	影	
gāo	chù	bù	shēng	hán		qǐ	wǔ	nòng	qīng	yǐng	
何	似	在	人	間							
hé	sì	zài	rén	jiān							
轉	朱	閣		低	綺	戶		照	無	眠	
zhuǎn	zhū	gé		dī	qǐ	hù		zhào	wú	miàn	
不	應	有	恨		何	時	長	向	別	時	圓
bù	yīng	yǒu	hèn		hé	shí	cháng	xiàng	bié	shí	yuán
人	有	悲	歡	離	合	月	有	陰	晴	圓	缺
rén	yǒu	bēi	huān	lí	hé	yuè	yǒu	yīn	qíng	yuán	quē
此	事	古	難	全							
cǐ	shì	gǔ	nán	quán							
但	願	人	長	久	千	里	共	嬋	娟		
dàn	yuàn	rén	cháng	jiǔ	qiān	lǐ	gòng	chán	juān		

* 蘇軾（1036-1101）中国北宋代の政治家、詩人、書家。四川省眉山県生まれ。字は子瞻（しぜん）。号は東坡居士。唐宋八家の一人。父の蘇洵、弟の蘇轍（そてつ）と合わせて三蘇と呼ばれる。1057年進士に及第して官途につくも神宗（1048-1085）の重用した王安石（1021-1086）と衝突して左遷される。44歳の時には新法を批判する詩を作り投獄され、あやうく死刑にされる危機に遭遇した。中国では初の筆禍事件として知られる（「烏代詩案」）。のちに恩赦を得て、黄州に流罪となる。神宗が崩御し哲宗（1076-1100）即位、旧法が復活すると側近に起用され礼部尚書に至るが、治世の後半に新法が復活され、晩年の蘇軾は惠州、海南島に流され、大陸への帰去を許された66歳のときに、波乱に富んだ生涯を閉じた。著作に『東坡七集』『東坡詞』『東坡志林』、代表作に「赤壁賦」などがある。

水調歌頭

名月 幾時より有る。酒を把りて青空に問ふ。
知らず 天上の宮闕 今夕是れ何れの年なるかを
風に乗り歸去せんと欲すれども
惟だ恐る瓊樓玉宇の
高處 寒さに勝へざらんことを
起ちて舞い清影を弄す、何ぞ似ん人間に在るに
朱閣に轉じ、綺戸に低くし、無眠を照らす
應に恨み有るべからざるに、何事ぞ長えに別る時に向ひて圓かなり。
人に悲觀離合有り 月に陰晴圓缺有り
此の事古より全うし難し
但だ願う 人の長久なるを
千里嬋娟を共にせんことを

語句

水調歌頭：唐代に「水調歌」という四部から成る大曲があり、その「歌頭」として95字から成る首段（元歌）の押韻の規則に倣って作詞されたために「蘇軾 水調歌頭」と言う

- 不胜 : 耐えられない、もちこたえられない
起舞 : 舞い始める
何似 : “何如，不如”（…のほうが良い）
人間 : 「じんかん」と読む。この世。人間の住む世界
綺戸 : まど
但願 : 願わくは…であってほしい
嬋娟 : 女性の姿態があでやかで美しいさま、ここでは月を指す

現代語訳

名月はいつから空にあるのだろう。盃を握り空に問いかける
天空の宮殿では今何年になるかわからないが、風に乗って尋ねてみたいものだ
風に乗りふるさとに帰りたくても、天上の宮殿とはどのようなものだろう
高いところは寒すぎるのではないだろうか
舞いにしたいが影ができるように月影はきらめき世上のあらゆるものを美しく照らし出す
そのような地上にいるほうがどれほどいいだろうか
月影は紅い樓閣を照らし、飾り窓にさしかかり中にいる人の無眠をやさしく照らす
自分に恨みがあるわけではないだろうに、どうしてこのようなときにいつまでも月は円くあるのだろう
人に悲觀離合があるように、月にも陰晴圓缺があり、このことは古来完全を目指すというのは難しいこと
であった
ただ、あなたがこれからもずっと長く健やかであることを願う。互いに千里は慣れていたとしても、共に
見上げる美しい月を共に見上げることはできる

ひとこと

蘇軾が1076年に地方官として蜜州（今の山東省）にいたときに作られた歌。歌のはじめに「丙辰中秋，歡飲達旦，大醉，作此篇，兼懷子由（丙辰（1076年）中秋，歡び飲みて旦（あさ）に達す，大いに酔ひて，此の篇を作り，兼（くはへ）て 子由を懷（おも）ふ。）」とある弟の蘇轍（字名は子由）とは七年間も会っていなかった。人間の悲歡離合の情を、この世を美しくやさしく照らし出す月に代表される宇宙の法則に沿わせ、自己の感情の矛盾や複雑さを繊細瀟洒に描写した。

テレサ・テンの「但願人長久」でも知られる。

39 日本刀歌（歐陽脩*）

日	本	刀	歌							歐	陽	脩	
rì	běn	dāo	gē							ōu	yáng	xiū	
昆	夷	道	遠	不	復	通	世	傳	切	玉	誰	能	窮
kūn	yí	dào	yuǎn	bú	fù	tōng	shì	chuán	qiē	yù	shuí	néng	qióng
寶	刀	近	出	日	本	國	越	賈	得	之	滄	海	東
bǎo	dào	jìn	chū	rì	běn	guó	yuè	gǔ	dé	zhī	cāng	hǎi	dōng
魚	皮	裝	貼	香	木	鞘	黃	白	間	雜	鑰	與	銅
yú	pí	zhuāng	tiē	xiāng	mù	qiào	huáng	bái	xián	zá	tōu	yǔ	tóng
百	金	傳	入	好	事	手	佩	服	可	以	襪	妖	凶
bǎi	jīn	chuán	rù	hào	shì	shǒu	pèi	fú	kě	yǐ	ráng	yāo	xióng
傳	聞	其	國	居	大	島	土	壤	沃	饒	風	俗	好
chuán	wén	qí	guó	jū	dà	dǎo	tǔ	rǎn	ào	ráo	fēng	sú	hǎo
其	先	徐	福	詐	秦	民	採	藥	淹	留	卣	童	老
qí	xiān	xú	fú	zhà	qín	mín	cǎi	yào	yán	liú	guàn	tóng	lǎo
百	工	五	種	與	之	居	至	今	器	玩	皆	精	巧
bǎi	gōng	wǔ	zhǒng	yǔ	zhī	jū	zhì	jīn	qì	wán	jiē	jīng	qiǎo
前	朝	貢	獻	屢	往	來	士	人	往	往	工	詞	藻
qián	cháo	gòng	xiàn	lǚ	wǎng	lái	shì	rén	wǎng	wǎng	gōng	cí	zǎo
徐	福	行	時	書	未	焚	逸	書	百	篇	今	尚	存
xú	fú	xíng	shí	shū	wèi	fēn	yì	shū	bǎi	piān	jīn	shàng	cún
令	嚴	不	許	傳	中	國	舉	世	無	人	識	古	文
lìng	yán	bù	xǔ	chuán	zhōng	guó	jǔ	shì	wú	rén	shí	gǔ	wén
先	王	大	典	藏	夷	貊	蒼	波	浩	蕩	無	通	津
xiān	wáng	dà	diǎn	cáng	yí	mò	cāng	bō	hào	dàng	wú	tōng	jīn
令	人	感	激	坐	流	涕	鏞	澁	短	刀	何	足	云
lìng	rén	gǎn	jī	zuò	liú	tì	xiù	sè	duǎn	dào	hé	zú	yún

* 歐陽脩（1007-1072）北宋の文学者、政治家。廬陵の人。字名は永叔。号は醉翁、六一居士。仁宗、英宗、神宗に使えたが、王安石の新政に反対して引退。北宋随一の名文家で唐宋八家の一人。著作に『新唐書』『新五代史』『集古録』『歐陽文忠公全集』（153巻）がある。

日本刀歌

昆夷の道遠ければ復た通ぜず、世に傳ふ切玉 誰か能く窮めん
寶刀 近く日本國を出ず 越賈 之を滄海の東に得る
魚皮にて 装ひ貼る 香木の鞘 黄白間雜す 鍔と銅
百金にて 傳へ入る 好事の手 佩服せば 以て妖凶を禳ふ可し
傳へ聞く 其の國 大いなる島に居り 土壤 沃饒にして 風俗好し
其の先 徐福の秦民を詐り 採藥せんと淹留し 卍童老ゆ
百工五種 之と與に居り 今に至るも 器玩 皆な精巧
前朝に貢獻し屢 (しばしば) 往來す 士人 往往 工詞 藻 (たくみ) なり
徐福行く時 書 未だ焚かざれば 逸書百篇 今尚ほ存す
令厳しくして中國に傳ふるを許さざれば 舉世して古文を識る人なし
先王の大典を藏し 夷貊 蒼波浩蕩として津に通ずるなし
人をして感激せしめ坐ろに流涕せしむ 繡澀なる短刀の 何ぞ云ふに足らん

語句

□賈：商人、店舗をもった大商 □滄海：①青黒い色の海、大海原②渤海 ここでは②の意味か
□魚皮：刀剣の柄木の補強と柄糸がずれないための工夫として「サメ皮」という鮫やエイの皮で作った皮をかぶせる。□好事：ものずき、おせっかいや □佩服：感心する □禳：御祓をする、災いを払う □其先：昔、以前 □徐福：秦代方士。始皇帝の命で童男童女数千名を連れて海中の三神山に不死の薬を探しに出かけたという。しかし三神山は発見できず、日本の紀州に上陸したとも言われている。 □詐：だます □淹留：〈文言〉滞在する、逗留する □卍：総角，昔時の幼児の髪のかき方。髪を左右に分けて頭上でわがね、双角状に両輪を作ったもの。転じて幼少を指す。 □卍童：幼児、少年 □百工五種：もろもろの職業と五穀の種 □詞藻：文章や詩歌 □古文：焚書以前の書物は古い自体で書かれている。漢代以降に復元されたものは秦以後の字体で書かれており、これを今文という。□夷貊：「夷」は東方の未開人、えびす。「貊」は満洲から朝鮮半島にかけて居住していた民族の総称、蔑称。 □繡澀：腐食して錆びの出た

現代語訳

昆夷への道は遠く、今は人も通わない
玉を切る名刀があると伝えられているが、今では誰も知る人がいない
近頃宝刀が日本国から来た
越の商人が渤海の東で手に入れたものだという
香木の鞘に装い巻かれた魚の皮
黄色と白が入り交じっているのは、真鍮と銅
百金で好事家の手にわたったとされる
すばらしいことには、これを帯びれば、邪気妖気を払う事ができるという
伝へ聞く、その国は大いなる島の上にある。土壤は肥沃で風俗も好い
かつて徐福が秦の民を欺き、神薬を採らせると滞留させたが童男童女は老いてしまった
彼らは様々な職業の人々と五穀の種とともにあったので、その技術のおかげで、今でも日本で作られる道具はみな精巧であるという
先の王朝（唐）の時代には貢ぎ物をささげに屢々往来があったという
士人の中には文章や詩歌を巧みに操る者もあるという
徐福が来日したときは書物はまだ焼かれていなかったの
日本には、今では中国で散逸してしまった多くの書籍がまだ存在するという
しかし禁令がきびしく、中国に伝えることが許されないため

世の中には誰一人として焚書以前の書物を手にとって読むことのできる人はいない
先王の定めた古典が夷狄の地に隠されているというのに、海原は広々として、尋ねに行くあてもない
夷狄の美しい刀を前に、このようなことに思いを馳せ、心が高ぶり、思わず涙するが、それはこの刀がこ
こに至るまでのことを考えたからであって、こんなに錆びてちびた短い刀が一口伝えられているからとい
って、取るに足りないことなのである

ひとこと

「日本刀歌」ではあるが、実は刀は全然どうでもよくて、ただ、秦代焚書以前に徐福が日本に持ち去った
とされる逸書に興味があるだけ、という詩でした。

40 一剪梅 (宋 李清照*)

一	剪	梅							
yī	jiǎn	méi							
紅	藕	香	殘	玉	簾	秋			
hóng	ǒu	xiāng	cán	yù	diàn	qiū			
輕	解	羅	裳		獨	上	蘭	舟	
qīng	jiě	luō	cháng		dú	shàng	lán	zhōu	
雲	中	誰	寄	錦	書	來			
yún	zhōng	shuí	jì	jǐn	shū	lái			
雁	字	回	時		月	滿	西	樓	
yàn	zì	huí	shí		yuè	mǎn	xī	lóu	
花	自	飄	零	水	自	流			
huā	zì	piāo	líng	shuǐ	zì	liú			
一	種	相	思		兩	處	閒	愁	
yī	zhǒng	xiāng	sī		liǎng	chù	xián	chóu	
此	情	無	計	可	消	除			
cǐ	qíng	wú	jì	kě	xiāo	chú			
纔	下	眉	頭		卻	上	心	頭	
cái	xià	méi	tóu		què	shàng	xīn	tóu	

* 李清照 (1087-1155?) : 北宋から南宋にかけての女性詩人。号は易安居士。済南の人。官僚の過程に生まれ、18歳で名家の趙明誠と結婚する。明誠は古籍文物を愛し夫婦仲も良かったが、金が挙兵したため北宋は滅び、明誠は戦死。生き延びた清照は江南へと逃れるが家財の大半を失い病気がちな晩年を過ごした。作品集に『漱玉集』一卷がある。

一剪梅

紅藕 香り残ない 玉簫 秋なり
軽く羅裳を解き
独り蘭舟に上る。
雲中 誰ぞ錦書を寄せ来たるや
雁字 回る時 月 西樓に満つ

花は自ずから飄零し 水は自ずから流る
一種の相思
兩處の閑愁
此の情 計る無く 消し除かるる可き
纒かに眉頭を下れば
卻つて心頭に上る

語句

一剪梅：詞の名前（詞牌名）。双調小令、十二句六十字からなり、平声で押印する。

玉簫：玉のようになめらかな竹の敷物。

輕解：ふわりと開く

羅裳：羅（うすぎぬ）のスカート

蘭舟：美しい船。「蘭」は美称である。一説には「蘭舟」は眠るための寝台を指すともいう

錦書：手紙（書信）の美称。錦の手紙

雁字：雁が一行に並んで飛ぶ様子を文字に見立てて言う。雁は飛ぶときに群になって「人」の形になるので、雁字を「人」に例えて言うこともある

飄零：枯れて落ちる、落ちぶれて流浪する

閑愁：うれい、かなしみ

無計：方法がない

現代語訳

紅い蓮の残り香はかすかに消えかけ、冷やかな竹蓆に秋の気配を感じる
風がふわりと裳裾を持ち上げ、わたしはひとり寝台に横になる
雲間から、誰が錦の手紙を送ってくれるかしら
雁が人の字になって帰るとき
月の光が西樓に満ちる

花はいつか散り、水はただ流れゆく
二人が離れていることへのひとつの思い、ふたつところでの悲しみ
やるばのないこの思い、この悲しみ、消えてしまえばいいのに
やっと頭から消し去ったかと思えば
すぐにもう胸の中からわいてくる

41 春日 (南宋 朱熹*)

春	日					朱	熹
chūn	rì					zhū	xī
	勝	日	尋	芳	泗	水	濱
	shèng	rì	xún	fāng	sì	shuǐ	bīn
	無	邊	光	景	一	時	新
	wú	biān	guān	g	jǐng	yī	xīn
	等	閒	識	得	東	風	面
	děng	xián	shí	dé	dōng	fēng	miàn
	萬	紫	千	紅	總	是	春
	wàn	zǐ	qiān	hóng	zǒng	shì	chūn

春日

勝日に尋芳す泗水濱
無邊の光景 一時新たなり
等閒に識り得る 東風の面
萬紫千紅 總て是れ春

語句

勝日：晴れ渡った日
尋芳：春の風物を賞でる、花を探し求める
泗水：河の名。現在の山東省にある。
濱：水辺
等閒：かるがると、何かの折に
東風面：春天、東風、春風

現代語訳

晴れ渡った日に泗水の水辺で花を賞でる
果てしない風景が、春になって一挙に変わった
春の兆しはすぐにわかるものである。
万紫千紅、色とりどりに咲き乱れる花々すべてが春の景色である

* 朱熹(1130-1200) 南宋の思想家、哲学者、詩人。のちに日本で官学となった「朱子学」を説いた人。婺源(ふげん、江西省)の人。字は元晦、仲晦。号は紫陽、晦庵など。諡は文公。18歳で進士に合格。早くに官を辞し、故郷で学問研究に没頭する。北宋の周敦頤らの思想を継承発展させ、倫理学、政治学、宇宙論にまで及ぶ体系的な哲学を完成し、構成に大きな影響を与えた。その後復権し地方の知事などを歴任しながら「論語」「孟子集注」など多くの研究書を世に出した。著作に『四書集注』『近思録』『周易本義』『晦庵先生朱文公文集』などがある。

ひとこと

清朝の学者、王相の著作『千家詩』によると、南宋は高宗紹興十一年（1141）、「紹興和議」によって宋金間に国境線が引かれ、南宋は淮河以北の旧領を放棄することとなった。このため、朱熹は実際に泗水を訪れることはなかったであろうとされている。

42 偶成 (南宋 朱熹*)

偶	成					朱	熹
ǒu	chéng					zhū	xī
	少	年	易	老	學	難	成
	shào	nián	yì	lǎo	xué	nán	chéng
	一	寸	光	陰	不	可	輕
	yì	cūn	guāng	yīn	bù	kě	qīng
	未	覺	池	塘	春	草	夢
	wèi	jué	chí	táng	chūn	cǎo	mèng
	階	前	梧	葉	已	秋	聲
	jiē	qián	wú	yè	yǐ	qiū	shēng

偶成

少年老い易く 学成り難し
一寸の光陰 軽んず可からず
未だ覚めず池塘 春草の夢
階前の梧葉 已に秋声

語句

偶成：たまたまできた詩
少年：若者。「少」は若い
光陰：光と影「光」は昼、「陰」は夜。時間を表す。
池塘：池の堤
階前：きざはしの前。「階（きざはし）」は堂に上る階段
梧葉：青桐の葉

現代語訳

少年は老い易く学問は大成しにくい
僅かな時間でも無駄にしてはならない
池の堤の若草の上でまどろんだ春の夢がまだ覚めないうちに
きざはしの前ので青梧の葉には已に秋風が吹くように時間はあっという間に過ぎ去ってしまうのである

* 朱熹(1130-1200) 南宋の思想家、哲学者、詩人。のちに日本で官学となった「朱子学」を説いた人。婺源（ふげん、江西省）の人。字は元晦、仲晦。号は紫陽、晦庵など。諡は文公。18歳で進士に合格。早くに官を辞し、故郷で学問研究に没頭する。北宋の周敦頤らの思想を継承発展させ、倫理学、政治学、宇宙論にまで及ぶ体系的な哲学を完成し、構成に大きな影響を与えた。その後復権し地方の知事などを歴任しながら「論語」「孟子集注」など多くの研究書を世に出した。著作に『四書集注』『近思録』『周易本義』『晦庵先生朱文公文集』などがある。

ひとこと

『漢詩の辞典』（大修館書店、1999年、170頁）によると、この詩は室町頃の日本人の禅僧の作が朱熹に仮託された、という可能性が強くなったそうである。事情どうあれ、時の流れの速さに対する嘆き、人生のはかなさに対する悲しみを描いたこの詩はこれからも愛唱されてゆくにちがいない。

43 過零丁洋 (南宋 文天祥*)

過	零	丁	洋			文	天	祥
guò	líng	dīng	yáng			wén	tiān	xiáng
	辛	苦	遭	逢	起	一	經	
	xīn	kǔ	zāo	féng	qǐ	yī	jīng	
	干	戈	寥	落	四	周	星	
	gān	gē	liáo	là	sì	zhōu	xīng	
	山	河	破	碎	風	飄	絮	
	shān	hé	pò	sùi	fēng	piāo	xù	
	身	世	浮	沈	雨	打	萍	
	shēn	shì	fú	chén	yǔ	dǎ	píng	
	惶	恐	灘	頭	說	惶	恐	
	huáng	kǒng	tān	tóu	shuō	huáng	kǒng	
	零	丁	洋	裡	歎	零	丁	
	líng	dīng	yáng	lǐ	tàn	líng	dīng	
	人	生	自	古	誰	無	死	
	rén	shēng	zì	gǔ	shuí	wú	sǐ	
	留	取	丹	心	照	汗	青	
	liú	qǔ	dān	xīn	zhào	hàn	qīng	

* 文天祥 (1236-1283) 字は宋瑞、また履善。文山と号した。吉州廬陵 (江西省吉安県) の人。二十歳のとき状元 (第一位) で進士に及第し大臣となったので「状元宰相」とも呼ばれる。元軍侵入に際して講和の使者となるが、失敗して捉えられ、大都 (北京) の土牢に幽閉され、その間に宋は滅亡した。元の世祖フビライはその才を惜しんで帰順させようとするも天祥は応じず、三年間の幽閉の後ついに処刑された。獄中の作に「正気歌」がある。

零丁洋を過ぐ

辛苦遭逢 一經より起こる
 千戈寥落たり 四周星
 山河破碎し 風 絮を飄はし
 身世浮沈し 雨 萍を打つ
 惶恐灘頭にて 惶恐を説き
 零丁洋裡にて 零丁を歎く
 人生 古より 誰か死無からん
 丹心を留取し 汗青を照らさん

語句

零丁洋：零丁洋とは即ち「伶丁洋」を指す。現在の広東省珠江口外。1278年末、文天祥は軍を率いて広東の五坡嶺にて元軍と激戦の後、捕虜となり船で北京へ護送される途中で零丁洋を通過した。

遭逢：めぐりあう、遭遇する

起一經：科挙合格のため、経書に精通することを通して科挙に合格し、朝廷に仕官することができた。文天祥は二十歳のときに状元（第一位）で進士に及第した。

千戈：南宋と元の交戦を指す

寥落：荒涼としたものさびしい様子

四周星：四年間。文天祥が1275年から兵を起し抗戦をはじめ、1278年に捕虜となるまでの四年。

絮：柳絮

萍：浮萍。池沼の水面に浮生する浮き草

惶恐灘：現在の江西省万安县にある灘（浅瀬、砂州）。贛江の中でも危険な場所である。1277年、文天祥は江西で元軍に敗れ、率いていた軍は死傷者も多く、兵士の妻や子も元軍に捕らえられ捕虜となった。文天祥は惶恐灘から福建まで撤退した。

零丁：孤独で頼るところがない

丹心：赤心、真心、忠心へのたとえ

汗青：汗竹に同じ。歴史書のこと。古代は竹簡に文字を書くために、先に火であぶってその中の水分を飛ばして乾かして、書きやすく、また虫の被害を出さないようにしたことによる。

現代語訳

零丁洋を過ぎる

思い起こせば、私が科挙のための勉強を始めたことから 救国のための苦心惨澹が始まったとも言える
 わたしが宋王室のために盾と矛をとって戦争をはじめてからすでに四年が過ぎた
 国はすでに破壊し尽くされ もはや風に漂う柳絮のよう
 この身もまたさすらいながら 雨に打たれて浮き沈みする浮き草のよう
 惶恐灘での惨敗し 私は国家滅亡の惶恐を説き
 零丁洋で捕虜になり 私は孤独で寄り添ない（零丁）ことを嘆く
 人生 古来より 死なない者などひとりもない
 どうせ死ぬ身であればこそ、この赤心を取り出して残し 歴史に輝かせたい

ひとこと

「零丁洋を過ぎる」は、南宋の大臣文天祥が1279年に広東の零丁洋を捕虜として通ったときに作った詩である。前二句で、詩人はこれまでの人生を振り返り、中間の四句で「千戈寥落」という現在の状況への認識を伝え、末尾二句で自身の人生の選択に対し一筋の迷いもないことを高らかに歌い上げた。文天祥の伝説的、自己犠牲的な生涯の物語と重なり、この詩はいっそうの輝きを帯び、文字通り中国の歴史の中でもひととき強い輝きを放っている。

44 大徳歌 (春) (元 關漢卿*)

大	徳	歌	(春)				關	漢	卿
dà	dé	gē	chūn				guān	hàn	qīng
	子	規	啼		不	如	歸		
	zǐ	guī	tí		bù	rú	guī		
道	是	春	歸	人	未	歸			
dào	shì	chūn	guī	rén	wèi	guī			
幾	日	添	憔	悴					
jǐ	rì	tiān	qiáo	cùi					
虚	飄	飄	柳	絮	飛				
xū	piāo	piāo	liǔ	xù	fēi				
一	春	魚	雁	無	消	息			
yì	chūn	yú	yàn	wú	xiāo	xì			
則	見	雙	燕	斗	銜	泥			
zé	jiàn	shuāng	yàn	dòu	xián	ní			

大徳歌 (春)

子規の啼く、不如歸。

道ふは是れ春歸り人未だ歸らずと。

幾日にて憔悴を添す、虚飄飄として柳絮飛ぶ。

一春にして魚雁の消息 (しらせ) 無く、則ち見る雙燕の泥を銜え鬪ふを。

語句

不如: したほうが良い、~に如かず。(古文の比較。「強似」「似」などさまざまな形式がある)

魚雁: 手紙の別称。

斗: あらそって、はげしく

* 關漢卿 生卒年未詳。金末から元代にかけての代表的劇作家。大都を中心に演劇活動を行った元曲の第一人者であり、代表作に「竇娥冤」「救風塵」「金線池」「胡蝶夢」「不伏老」などがある。

現代語訳：

春の杜鵑が「不如歸」と啼くのは、「帰ってこいよ」と言っているかのよう。

行くときに春になったら帰ってくると言うのに、こうして春が来ても、影さえ見えない。近頃ではわたしの美しかった容貌もますます憔悴してしまった。まるまる一春九十日を待って、結局何の知らせもなかったのに、燕は早々と帰ってきて、つがいになって忙しくも楽しそうに巣作りをしている。

ひとこと

「大徳歌」は関漢卿が元の成宗年間（1297-1307）に創作した新しい曲調である。この歌が作られた詳しい年については明らかではない。詩の内容は、若い女性が、出奔した夫あるいは情人の帰りを待つことを詠んだ歌。燕が泥を運ぶというのは、つがいができ、巣作りをしていることを指し、目出たい春の兆しを見ても我が身の境遇を恨めしく思う気持ちであろうか。

45 大徳歌 (夏) (元 關漢卿*)

大	徳	歌	(夏)					關	漢	卿
dà	dé	gē	xià					guān	hàn	qīng
	俏	冤	家	在	天	涯				
	qiào	yuán	jiā	zài	tiān	yá				
	偏	那	里	綠	楊	堪	系	馬		
	piān	nà	lǐ	lǜ	yáng	kān	xì	mǎ		
	困	坐	南	窗	下					
	yīn	zuò	nán	chuāng	xià					
	數	對	清	風	想	念	他			
	shù	duì	qīng	fēng	xiǎng	niàn	tā			
	蛾	眉	淡	了	教	誰	畫			
	é	méi	dàn	liǎo	jiào	shuí	huà			
	瘦	岩	岩	羞	戴	石	榴	花		
	shòu	yán	yán	xiū	dài	shí	liú	huā		

大徳歌 (夏)

冤家 俏たり。天涯に在りて。

偏へに緑楊の馬を系ぐに堪へん。

南窗の下に困坐し。

数く清風に対するに 想念するの他。

蛾眉 誰に画かしむ。

瘦岩岩として羞戴する 石榴花。

語句

俏冤家: 美しい愛しい人。

偏 : ひとえに、ことさら (楊が頼りないので馬がつけないという恨み言)

* 關漢卿 生卒年未詳。金末から元代にかけての代表的劇作家。大都を中心に演劇活動を行った元曲の第一人者であり、代表作に「竇娥冤」「救風塵」「金線池」「胡蝶夢」「不伏老」などがある。

現代語訳

美しい愛しい人はどこにいるのだろう。これもひとえにあの緑楊の木では彼の馬をつなぐのには十分ではないためだ。

南に面した窓の下に困座し、清風に対するごとに彼を思う。

眉が薄くなってしまっても誰に描いてもらえばいいのやら。

こんなにごつごつとやせてしまって、飾るのも恥ずかしいような石榴の花。

46 大徳歌 (秋) (元 關漢卿*)

大	徳	歌	(秋)					關	漢	卿
dà	dé	gē	qiū					guān	hàn	qīng
	風	飄	飄	雨	瀟	瀟				
	fēng	piāo	piāo	yǔ	xiāo	xiāo				
	便	做	陳	搏	睡	不	着			
	biàn	zuò	chén	tuán	shuǐ	bù	zháo			
	懊	惱	傷	懷	抱					
	ào	nǎo	shàng	huái	bào					
	撲	簌	簌	淚	點	拋				
	pū	sè	sè	lèi	diǎn	pāo				
	秋	蟬	兒	噪	罷	寒	蛩	兒	叫	
	qiū	chán	ér	zào	bà	hán	qióng	ér	jiào	
	浙	零	零	細	雨	打	芭	蕉		
	xī	líng	líng	xì	yǔ	dǎ	bā	jiāo		

大徳歌 (秋)

風飄飄、雨瀟瀟として便ち陳搏の睡りに着けず
懊惱し懷抱を傷め、撲簌簌として泪点つ
秋蟬の噪罷み 寒蛩兒の叫く
浙零零として細雨の芭蕉を打つ

語句

陳搏：陳搏。五代宋初の著名な道士。字は因南、自ら扶搖子と号す。華山にて修行を積み、一度寝ると百日起きなかったという
撲簌簌：涙が流れる様子
蛩：こおろぎ
浙零零：雨音

* 關漢卿 生卒年未詳。金末から元代にかけての代表的劇作家。大都を中心に演劇活動を行った元曲の第一人者であり、代表作に「竇娥冤」「救風塵」「金線池」「胡蝶夢」「不伏老」などがある。

現代語訳

寒風が吹いて、冷たい雨が降り、あの陳搏さえも眠れなくなる。

語り尽くせない煩惱と悩みが心を蝕み、傷心の涙がぽたぽたと真珠を抛つように落ちる。

秋蟬の鳴き声はやんだかと思えばすぐに蟋蟀が啼きだした

さわさわと小雨が芭蕉の葉を打つ音がする。

47 大徳歌 冬 (元 關漢卿*)

大	徳	歌	(冬)					關	漢	卿
dà	dé	gē	dōng					guān	hàn	qīng
	雪	紛	紛	掩	重	門				
	xuě	fēn	fēn	yǎn	zhòng	mén				
	不	由	人	不	断	魂				
	bù	yóu	rén	bú	duàn	hūn				
	瘦	損	江	梅	韻					
	shòu	sǔn	jiāng	méi	yùn					
	那	里	是	清	江	江	上	村		
	nǎ	lǐ	shì	qīng	jiāng	jiāng	shàng	cūn		
	香	閨	裡	冷	落	誰	瞅	問		
	xiāng	guī	lǐ	lěng	luò	shuí	qiū	wèn		
	好	一	個	憔	悴	的	憑	欄	人	
	hǎo	yí	ge	qiáo	cùi	de	píng	lán	rén	

大徳歌 (冬)

雪紛紛として重門を掩る。人の魂を断たざるを由らず
瘦損する江梅韻
那里に是れ清江江上村なるか
香閨里にて冷落するも誰ぞ瞅問す
好一個の憔悴して栏に憑たるるの人

語句

断魂：人の悲しみを形容したことば
江梅：唐玄宗皇帝の妃である梅妃を指す。本姓は江、梅を愛したことにより、玄宗より梅妃の名を賜った
瘦損江梅韻：梅妃のようにやせ衰えていく様
凭栏人：ひとり欄干によりかかり雪景色を見る寂寞たるも断固とした心境を表す

* 關漢卿 生卒年未詳。金末から元代にかけての代表的劇作家。大都を中心に演劇活動を行った元曲の第一人者であり、代表作に「竇娥冤」「救風塵」「金線池」「胡蝶夢」「不伏老」などがある。

現代語訳

雪が降りつもり　そうでなくても重たい門を遮る。人はこんなときに絶望するしかないのだろうか。梅妃の風雅な顔はもはやつれ衰えてしまった。高い山も行く人を遮らないという清江江上村はどこにあるのだろう。

閨房の中はさめきって、訪れる者もない。

みなが家の中に閉じこもる寒い冬、それでもただひとり憔悴して欄干にもたれ雪景色を見る。

48 常山有虎將 (明 羅貫中*)

常	山	有	虎	將			羅	貫	中
cháng	shān	yǒu	hǔ	jiàng			luó	guàn	zhōng
常	山	有	虎	將	智	勇	匹	關	張
cháng	shān	yǒu	hǔ	jiàng	zhì	yǒng	pí	guān	zhāng
漢	水	功	勳	在	當	陽	姓	字	彰
hàn	shuǐ	gōng	xūn	zài	dāng	yáng	xìng	zì	zhāng
兩	番	扶	幼	主	一	念	達	先	皇
liǎng	fān	fù	yòu	zhǔ	yí	niàn	dá	xiān	huáng
青	史	書	中	烈	應	流	百	世	芳
qīng	shǐ	shū	zhōng	liè	yīng	liú	bǎi	shí	fāng

常山に虎將有り。

常山に虎將有り

智勇関張にぶ。

漢水に功勳在り

当陽に姓字彰かなり

兩番 幼主をたすけ

一念 先皇に達す

青史に中烈を書し

應に百世に芳を流すべし

* 羅貫中 生没年未詳。元末明初の小説家、劇作家。宋、元代に流行した話本をもとに『三國志演義』『水滸伝』などの白話長編小説を作った。

49 憶昔常山趙子龍（明 羅貫中*）

憶	昔	常	山	趙	子	龍		
yì	xī	cháng	shān	zhào	zǐ	lóng		
							羅	貫
							luó	guàn
								中
								zhōng

憶	昔	常	山	趙	子	龍
yì	xī	cháng	shān	zhào	zǐ	lóng

年	登	七	十	建	奇	功
nián	dēng	qī	shí	jiàn	qí	gōng

独	誅	四	將	來	衝	陣
dú	zhū	sì	jiāng	lái	chóng	zhèn

猶	似	當	陽	救	主	雄
yōu	sì	dāng	yáng	jiù	zhǔ	xióng

憶昔す常山の趙子龍

憶昔す常山の趙子龍

年登ること七十 奇功を建つ

独り誅す四将 来たりて陣を衝きしは、

猶ほ当陽に主を救うの雄に似ん

* 羅貫中 生没年未詳。元末明初の小説家、劇作家。宋、元代に流行した話本をもとに『三國志演義』『水滸伝』などの白話長編小説を作った。

50 葬花吟 (抄) (清 曹雪芹*)

葬 花 吟								林 黛 玉
zàng huā yín								lín dài yù
花 魂 鳥 魂 總 難 留							鳥 自 無 言 花 自 羞	
huā hún niǎo hún zǒng nán liú							niǎo zì wú yán huā zì xiū	
願 奴 脇 下 生 雙 翼							隨 花 飛 到 天 盡 頭	
yuàn nú xié xià shēng shuāng yì							suí huā fēi dào tiān jìn tóu	
天 盡 頭			何 處 有 香 丘					
tiān jìn tóu			hé chù yǒu xiāng qiū					
未 若 錦 囊 收 艷 骨							一 堆 淨 土 掩 風 流	
wèi ruò jǐn náng shōu yàn gǔ							yī duī jìng tǔ yǎn fēng liú	
質 本 潔 來 還 潔 去							強 於 污 淖 陷 渠 溝	
zhì běn jié lái hái jié qù							qiáng yú wū nào xiàn qú gōu	
爾 今 死 去 儂 收 葬							未 卜 儂 身 何 日 喪	
ér jīn sǐ qù nóng shōu zàng							wèi bǔ nóng shēn hé rì sàng	
儂 今 葬 花 人 笑 痴							他 年 葬 儂 知 是 誰	
nóng jīn zàng huā rén xiào chī							tā nián zàng nóng zhī shì shuí	
試 看 春 殘 花 漸 落							便 是 紅 顏 老 死 時	
hì kàn chūn cán huā jiàn luò							biàn shì hóng yán lǎo sǐ shí	
一 朝 春 盡 紅 顏 老							花 落 人 亡 兩 不 知	
yī cháo chūn jìn hóng yán lǎo							huā luò rén wáng liǎng bù zhī	

* 曹雪芹 (1715ころ～1764ころ) 清の小説家。『紅樓夢』の作者。名前は霑 (てん)、字は芹圃。号は雪芹、芹溪など。満州貴族の生まれで、南京の名門に生まれたが、少年時代に家が没落。晩年、貧困のうちに小説『紅樓夢』の執筆に没頭するも未完のまま病没。

花を葬るの吟（抄）

願わくは 我が双脇に翼の生えて 花とともに飛びゆかん 空の果てに
天路の果て いずくにか香丘あらん
かの錦囊に艶骨収め ひとくれの浄土にて風流を掩うに如かず もと無垢の身にしあれば、無垢にて還え
る 溝川に汚れんよりはましならん しかるに今爾の身罷りて我が葬るに 我が身とて何日果てるとも
知れず 我の今花を葬るを癡かと笑え いつの日か我を葬るは誰ぞ
見よ 春の尽きんとし花散りぬ まさに紅顔老い死すの時 一朝にして春の尽き紅顔老いさらばえて
花落ち人亡くふたつながら行方も知れず

ひとこと

『紅樓夢』の女主人公林黛玉の作。詩の天才にして絶世の美少女、林黛玉が、散りゆく花を我が身の薄幸になぞらえて詠む歌。長編小説の前半部分のクライマックスでもある。たいへん長い詞なので、最後の部分だけを抜粋した。作者は実体験から『紅樓夢』の創作を思いついたと言うが、あるいは、かつて身边に林黛玉のような早熟の少女がいて、作中の詩もそのかつての少女の書いた詩だったのかもしれない。

51 蘭花草 (胡適)

蘭	花	草					胡	適	
lán	huā	cǎo					hú	shí	
我	從	山	中	來	帶	着	蘭	花	草
wǒ	cóng	shān	zhōng	lái	dài	zhe	lán	huā	cǎo
種	在	小	園	中	希	望	花	開	早
zhòng	zài	xiǎo	yuán	zhōng	xī	wàng	huā	kāi	zǎo
一	日	看	三	回	看	得	花	時	過
yí	rì	kàn	sān	huí	kàn	dé	huā	shí	guò
蘭	花	卻	依	然	芭	也	無	一	個
lán	huā	què	yī	rán	bāo	yě	wú	yí	gè
轉	眼	秋	天	到	移	蘭	入	暖	房
zhuǎn	yǎn	qiū	tiān	dào	yí	lán	rù	nuǎn	fáng
朝	朝	頻	顧	惜	夜	夜	不	相	忘
zhāo	zhāo	pín	gù	xī	yè	yè	bù	xiāng	wàng
期	待	春	花	開	能	將	夙	願	成
qī	dài	chūn	huā	kāi	néng	jiāng	sù	yuàn	cháng
滿	庭	花	簇	簇	添	得	許	多	香
mǎn	tíng	huā	cù	cù	tiān	dé	xǔ	duō	xiāng

蘭花草

山から蘭の花をとってきた。庭に植えて、花が早く咲くといいと願う。一日に何度も様子を見て見るけれど、蘭はつぼみ一つさえつけなかった。秋が来るので蘭を暖かい部屋に入れた。毎朝様子を見て、毎晩心配でたまらない。春になって花が咲けば願いがかなうだろう。そのときは庭いっぱい花が咲いて、たくさんさんの香りで満たされるだろう。

語句 □蘭花: 蘭の花、蘭 □種 : 植える □時過: 時が経つにつれて様子が変わること □卻 : 反対に、かえって □依然: 相変わらず □芭 : つぼみ □無 : ない (= 没有, ⇔ 有) □轉眼: またたく間に □頻 : しょっちゅう □顧惜: きにかける □相: 一方が他方に働きかける行為や態度を表す。主として単音節動詞を修飾する。例: 相幫 (助ける)、相處 (つきあう、生活や仕事をともにする)、相得 (気が合う)、相干 (かかわりあう) 等。 □將: ~を (“把” と同意) □夙願: 宿願 □償: 満たす、果たす □簇簇: 群がる、連なる □許多: おおくの、あまねく

胡適 (1891-1962) : 文学者、思想家。安徽省出身。アメリカ留学を経て、北京大学教授となる。五四運動のころから言文一致を目指した白話文学を提唱し、雑誌『新青年』に「文学改良芻議」を投稿して文人階級に衝撃を与えた。1930年徐志摩らとともに「新月社」を結社、新しい文学のあり方を模索する。1946年北京大
学長、1948年にアメリカに亡命し、後に台湾で病没した。『四十自述』『胡適文存』など多くの著書がある。

52 偶然（徐志摩*）

偶	然							徐	志	摩
ǒu	rán							xú	zhì	mó
我	是	天	空	裡	的	一	片	雲		
wǒ	shì	tiān	kōng	lǐ	de	yī	piàn	yún		
偶	爾	投	影	在	你	的	波	心		
ǒu	ěr	tóu	yǐng	zài	nǐ	de	bō	xīn		
你	不	必	訝	異		更	無	須	歡	喜
nǐ	bù	bì	yà	yì		gèng	wú	xū	huān	xǐ
在	轉	瞬	間	消	滅	了	蹤	影		
zài	zhuǎn	shùn	jiān	xiāo	miè	le	zōng	yǐng		
你	我	相	逢	在	黑	夜	的	海	上	
nǐ	wǒ	xiāng	féng	zài	hēi	yè	dì	hǎi	shàng	
你	有	你	的		我	有	我	的	方	向
nǐ	yǒu	nǐ	de		wǒ	yǒu	wǒ	de	fāng	xiàng
你	記	得	也	好		最	好	你	忘	掉
nǐ	jì	dé	yě	hǎo		zuì	hǎo	nǐ	wàng	diào
在	這	交	會	時	互	放	的	光	亮	
zài	zhè	jiāo	huì	shí	hù	fàng	de	guāng	liàng	

偶然

私は空に浮かぶひとひらの雲 偶然にあなたのさざめく心を映し出した
あやしむ必要はない、また喜ぶ必要もない
あつという間に跡形もなく消えてしまうから
君と私は夜の海で出会った
君には君の、私には私の行くべきところがある
覚えていてくれてもいいけど やっぱり忘れてしまうほうがいい
この出会いのときに飛び散った火花のことなんて

* 徐志摩（1897-1931）：詩人。浙江省出身。滬江大学、北京大学などを経てアメリカとイギリスに留学。ケンブリッジ大学在学中から文学に志す。帰国後は北京大学、清華大学などの教授を歴任し、この間、聞一多、胡適らと新月社を組織する。主義や党はに反対し、文壇のブルジョア派とみなされて革命文学派と対立した。1931年に飛行機事故で急死。詩集に『志摩の詩』『翡冷翠（フィレンツェ）の一夜』などがあり、理想主義的な情熱と新しい形式美によって一世を風靡した。

語句

偶爾：たまさかに、ぐうぜん

訝異：あやしむ

歡喜：よろこぶ

記得：おぼえる

忘掉：わすれてしまう

53 一代人（顧城*）

一	代	人						顧	城
yí	dài	rén						gù	chéng
黑	夜	給	了	我	黑	色	的	眼	睛
hēi	yè	gěi	le	wǒ	hēi	sè	de	yǎn	jīng
我	卻	用	它	尋	找	光	明		
wǒ	què	yòng	tā	xún	zhǎo	guāng	míng		

一代人

闇夜は私に黒い瞳を与えたが
わたしはその黒い瞳で光明を探す

語句

黑夜：夜、くらやみ。（「昼」は<白天>という。）

黑色：中国語の「黒」にはたくさんの意味がある。①黒い色、②暗黒、③秘密の、非合法の、地下の、④悪い、悪辣な、⑤反革命的な、反動的な

眼睛：目、瞳

卻：軽い逆説をあらわす、…けれども

寻找：さがしもとめる

光明：①光明、光、②光り輝いている、③、希望に満ちている、輝かしい、④公明正大である。

* 顧城：1956～1993年。朦朧詩（象徴や跳躍の手法を駆使した難解な詩。70年代のはじめから手写本になどによって一部の青年の間で読み伝えられ、のちにその難解さゆえに「詩謎」とも呼ばれた象徴詩を指す）の代表的人物。文化大革命前に詩の創作を始める。後に、ニュージーランドへ渡り、オークランドの外海の島での生活中、誤って妻である詩人の謝焯を殺害して自殺した。代表的詩集に『黒眼睛』がある。